特集
ズームアップ

戦時期の京都

京都 TOMORROW

それぞれの京都論

1993/9
Vol.2-No.7
隔月刊

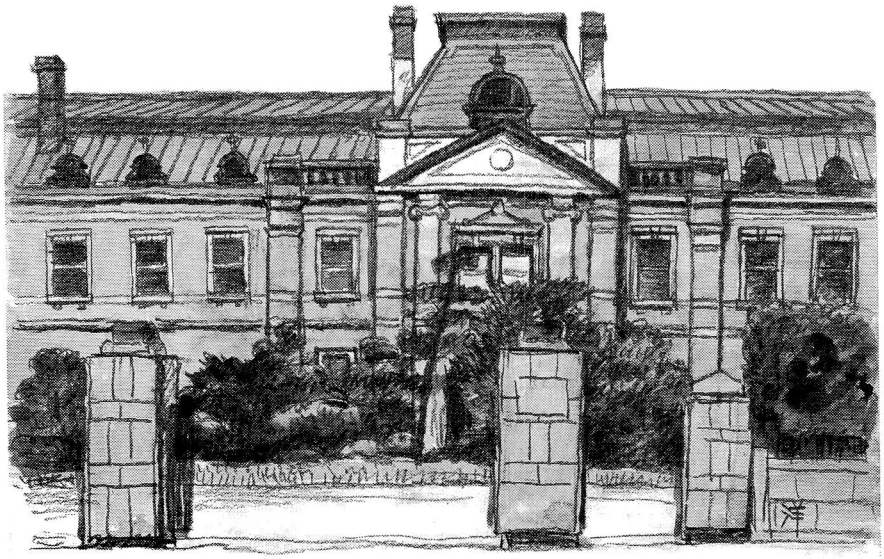
戦時期の京都を観る——田中 真人

座談会 **我が青春に悔いあり**」学徒勤労動員の記憶
強制立退き、戦時下の喫茶店、
戦時の工場・結婚・出産・夫の死、
そのとき大学は—田畑忍さんに聞く、
学校教育—「国定教科書」や子どもたち、
祇園祭とその復活、大文字は人文字だった、
京都にも空襲はあった、戦時報道規制の中で
自治組織も崩壊した、戦争中の精神病院、…

証言・体験 **京都からカンボジア選挙監視員になって**

インタビュー 『アジアの子どもと売春』 青木苗子

ライブラリー



軍都・伏見の遺跡

耕やす田畑を奪われた深草村の小作人たち。その犠牲のうえに一九〇八（明治四十一）年、陸軍第十六師団は伏見に定着し、軍用道路の師団街道も設置された。師団とは歩兵、騎兵、砲兵、工兵、輜重兵が揃い、それだけで戦争ができる部隊である。伏見を歩くと、明治から十五年戦争まで引き継がれた戦争のシンボルにたくさん出あう。

赤レンガ造りの聖母学院本館は権威の象徴、もと第十六師団司令部だった。聖母に払い下げられ、正面の菊マークは一九四九年に取り除かれたが、いちど塗られた墨の影は今も認められる。内部は木造。乗馬用に受付の跡は高い。天井も高く、階段は広い。その手すりには見事な木彫りが残り、床にはいくつもサーベルの跡が残る。二階正面は司令官室。今もほぼそのまま残存され、昔任務していた人が、今もときどき訪れるという。

現在の竜谷大学や警察学校は兵器の収納所。九つの町名を失って一つにされた今の西浦町は京都練兵場。青少年科学センター周辺は砲兵の、京都教育大学は歩兵の兵営だった。その付属高校あたりは弾薬や食糧を補給する所。深草中学校付近は〝騎兵第二十聯隊〟でその近くは実弾射撃場。国立京都病院はもと陸軍病院で、現在の伏見税務署には〝京都憲兵隊〟が置かれていた。

軍道、軍人湯、陸軍墓地。そして道端に並ぶ石柱も溝にかくれた石柱も、軍隊の歴史を刻んで今をみつめる。

イラスト　辻本洋太朗

軍都・伏見の遺跡

中山和弘

道路名に戦時中の名残が残っている（京都市伏見区深草）

旧陸軍兵器廠京都支廠の兵舎。現在は京都府警察学校の一部になっている。

疏水に架かる橋には旧陸軍の星形マークが残っている。その名も「師団橋」。

京都教育大学のそばにある石柱。消された部分には「陸軍」の文字が刻まれていたらしい。

輜重第十六大隊の兵舎。現在は京都教育大学付属高校の更衣室として使われている。

昔の軍道の両側に並んでいた石柱が今も残っている。京都市伏見区内の第二軍道。

特集

ズームアップ

戦時期の京都

――証言・体験を追う――

八月十五日にまた、敗戦記念日を迎える。

戦後四十八年、この日本では戦争を知らない世代が、国を動かす中心となりつつあり、PKO論議が契機となって、憲法論議も新しい段階を迎えている。

しかし、一方では戦争体験を風化させないとする動きも活発である。慰安婦問題、強制連行問題など戦後補償問題が改めて問われている。戦争体験の記録づくりもあちらこちらで取り組まれている。アメリカ側が押収した資料から秘密のベールに閉ざされていた戦時中の真実の歴史がようやく解明されつつある。

この京都では立命館大学に平和ミュージアムという素晴らしい展示施設があり、いつでも戦争時の資料を見ることができる。

しかし、戦争体験世代は、終戦時二十歳の人でも既に七十近く、毎年着実に減少している。これまで戦線、抑留、引き揚げの体験の記録は数多く出版されて来ているが、銃後の生活記録は余り眼に触れることはない。戦争は人々の生活そのものを根底から変えてしまう。その身近な記録が欲しいというのが、この特集の狙いである。

戦争は、何気ない平和な生活に遠慮なく侵入して来る。その中で庶民は抵抗する術もなく、しかし、しぶとく生き抜いてきた。その実感をとくに戦争を知らない世代が追体験できないか。そんな願いをこめて、この号を送り届ける。

京都 TOMORROW

VOL.2 第7号（通巻第29号）

目　次

◉グラビア　軍都・伏見の遺跡巡り　写真／中山和弘 ―― 1

ズームアップ

戦時期の京都

―証言・体験を追う―

■エッセイ

戦時期の京都を観る　田中真人 ―― 8

■座談会

我が青春に悔いあり

―学徒勤労動員の記憶―

西御池通りの立退き　山内邦子 ―― 22

御池通りにこだわりつづける ―八歳の記憶―　山本時子 ―― 24

戦時下の喫茶店と『土曜日』 ―― 26

戦時の工場・結婚・出産そして夫の戦病死 ―― 28

その時、大学は ―元同志社大学学長 田畑忍さんに聞く― ―― 30

「国定教科書」の歴史 ―― 33

あの頃の子は今の子より元気だった ―― 34

静かな自然がいちばんの友達 ―― 35

沈黙の十年・大本教弾圧とそれ以後　稲垣良代 ―― 36

戦時下の祇園祭とその復活 ―― 38

大文字は人文字だった ―― 39

京都にも空襲があった ―― 40

■証言・体験

特　集

戦時報道規則の中での暮らしはつくづく恐いもの ―― 42
その時、自治組織も完全に崩壊した ―― 44
戦争中の精神病院　塚崎直樹 ―― 46

●五島列島紀行文 ③　遥かつづく海、恵みの島　一居時江 ―― 54

●TOMORROWライブラリー
『アジアの子どもと売春』ロン・オグレディ・著　青木苗子 ―― 58
京都発新刊三冊『下鴨神社糺の森』『老人が使いやすい道具案内』『日本文化としての公園』

●べんちゃん日記 ⑤　唯野弁太郎 ―― 56

●TOMORROWインタビュー
守屋保彦さん　京都からカンボジアの選挙監視員になって ―― 50

●TOMORROWジャーナル
新党旋風は、京都でも／ほか　イラスト時評　石川裕二 ―― 60

●TOMORROWひろば
●建築ウォッチング　建築探偵団調書⑦　東本願寺前噴水　円満字洋介 ―― 62
●くらし　ほんの少しだけ季節を装う暮らし　奥村奈智子 ―― 64
●ギャラリー　今、さりげなく　人見ジュン子 ―― 65
●京・若者発　タイ・サバーイな日々を学ぶ　平良響子 ―― 66
●ステばあさんが行く ⑦　お金にうるさいのは世間の方や　神楽岡ステ ―― 67
●あぴーる　自衛官人権ホットライン　足立修行 ―― 49

☆合評会のお知らせ ―― 68　☆次号予告 ―― 68　☆編集後記 ―― 68　☆イラスト・辻本洋太朗 ―― 表2

特集　戦時期の京都

戦時期の京都を観る

田中真人（同志社大学教授）

京都の空襲

京都は「非戦災都市」だから京都市民の戦争体験は日本国民一般のそれと大きく異なると考えがちだが、これは予断に過ぎない。空襲による焦土作戦が本格化し、地方都市もふくめた本土の大半の町が戦災に見舞われるのはほとんどが敗戦にいたる半年間のことである。自分の住む町への本格的空襲に対する待機状態においては、この時期の京都は他都市と変わるところはない。京都市民もこのじゅうたん爆撃に対応するバケツリレー訓練、学童疎開、建物疎開、竹槍訓練などの諸活動は一通り経験したし、ここに至る十五年戦争期の節目ごとに全国で起こった社会事象も、きちんとなぞっている。御池・五条・堀川・紫明といった市内幹線道路が、戦争末期の空襲に対応するための防火線作りである建物疎開の後にできた遺産であることは、今日では忘れられつつあるが、灰燼に帰す戦災がなかったぶんだけ、こうした人為的な戦争の痕跡は今日も鮮明であるともいえる。

また京都市がまったく空襲に遭わなかったということではない。馬町や西陣の空襲のことは情報管制下の戦時からでも広く知られていたことだが、こうした京都空襲の実態が広く調査され、その全貌が明らかになったのは一九七〇年代以降のことである。この頃から全国各地に「空襲を記録する会」といった、多くは市民による自主的な調査団が組織されたが、本格的な空襲のなかった京都においても、他の地域と肩を並べてこの種の活動がなされたのは誇っていい①。そして近年には、京都が空襲を免れた真の理由は、原爆投下目標として京都を温存するという米軍の軍事的理由のためであったこと、この真の理由を隠蔽するために、文化財を守るため京都・奈良の空襲回避に尽力したという「ウォーナー伝説」が戦後

になってから意図的に作り出されたとの説が説かれている②。

京都における戦争の痕跡

京都は第十六師団をはじめとする軍施設の所在地であり、第二次大戦末期には梅津の新三菱重工業京都製作所など、戦争に直結する重化学工場が設立された（一九四五年二月には、チンチン電車蹴上線を廃線にしてそのレールを西大路以西の四条通りの市電に転用し、重化学工場

戰爭終結の大詔渙發さる
新聖旨の御下に大御心
帝國四國宣言を受諾
必ず國威を恢弘
聖斷下る途は一つ
モンペ姿に親しみ
あの行列は危いな
配給外に補給

通勤者の便に供するという象徴的なことも行われた）。だから京都も戦争から切り放された牧歌的な「文化都市」たり得たわけではさらさらない。

京都は平和産業の都会、文化都市だから、戦争はつねに京都にとってデメリットであったと説かれることが多い。「ぜいたくは敵だ」の標語の法令上の根拠となった「七・七禁令」すなわち一九四〇年七月七日施行の奢侈品等製造販売制限規則が、京都最大の地場産業である西陣に大打撃を与えたことはその代表的事例だ。昭和の天皇即位大典に間に合わすべく突貫工事で行われた奈良電車（現在の近鉄京都線）敷設工事が、伏見の町を貫通するルートにつき、軍事防謀上の理由から地下ルートを主張した軍に対し、製酒の生命線である良好な地下水脈がとぎれるとして、独自の調査団を委嘱してついに高架線での敷設を実現した伏見酒造界の活動も、もっぱら軍と利害の対立した地場産業という図式でもって語られている③。

だからといって師団をはじめとする軍事関連施設の設置が地元にはデメリットばかりであったとするのは空論である。日露戦争中に編成された第十六師団の京都設置が決まったのは一九〇七年のことだが、京都のどこに置くかをめぐって京都市、紀伊郡、伏見町などを巻き込んだ大誘致合戦が展開された。近代になってから、淀川北岸を走る官営鉄道や、一八九五年の京都電気鉄道伏見線、

一九一〇年の京阪電車の開通、近代工場施設の設置が行われたが、これらは必ずしも伏見の隆盛にはつながらず、むしろ近世以来保持していた伏見の安定的地歩を危うくするものとして作用した。地元には転がり込んで来たような師団の設置計画に対しては、斜陽の町伏見の失地回復策として懸命な誘致運動がなされ、つづく明治天皇伏見桃山陵点定とともに、地元の期待に十分に応えて伏見の町をうるおした。そのことは四〇年にわたる師団の存在が今日まで残している様々な痕跡によって十分に窺うことができよう④。

排外主義の蔓延と京都

一九三一年九月の柳条湖事件の勃発は、広範な国民を排外主義の波のなかにさらい、日本の社会状況が戦争への熱狂に転換するエポックであった。この時期の新聞をひもとけば、学校生徒や子供、さらに「醜業婦」さえもが国防献金を拠金し、慰問品を送るといった無数の「美談」の報道を見ることができる。こうしたことはこの時期に全国いたるところで見られたことであるが、ある歴史家は、大新聞社が募った国防献金公募状況を分析し、東京ではホワイトカラーの多い山の手地区よりは、労働者・無産者階級層の多い下町地区が、少なくとも応募口数でははるかに多いことを論証した⑤。こうした分析を全国に広げたら、京都はどのくらいの位置を占めるであろうか。この後に展開される「満州移民」計画の応募者は、昭和恐慌にさいなまれた小作人や労働者、すなわち本来なら無産政党が組織すべきはずの人々であるが、この「満州移民」の応募状況の府県別比較では京都府は下位に属する。しかし「満州事変」勃発直後の地元紙『京都日出新聞』を少しでもひもとけば、京都は相対的に戦争にクールであったなどとはとても言う気にはならない。

戦時下の知識人

満州事変の勃発が一般国民にとっての戦時体制下へのエポックメーキングであるとすれば、知識人にとってのそれは一九三三年の滝川事件であろう。一九六〇年代に「安後派」なる言葉があった。安保闘争を学園で迎えるには遅すぎた世代、その運動の壊滅のなかでエネルギーの目標がなくなっていることを悔やんでいる世代を示す言葉であったが、滝川事件以後の一変した学園の空気のなかにやって来た社会的意識のある学生は同様の「滝川後」の閉塞状況を感じたかもしれない。

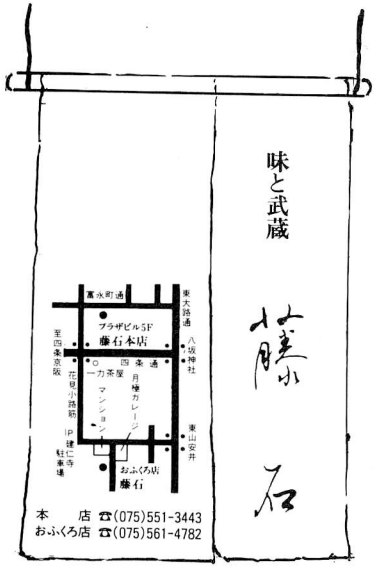
滝川事件後の学生の運動はますます地下潜行的になった。ちょっとした社会科学書の学習会でさえも検挙されるご時世だったから。それでも果敢に左翼運動に飛び込

む若者はいた。それは野間宏の小説『暗い絵』が描いたように「旗を揚げ、旗の位置を示すだけ」の玉砕に終わったにせよ⑥。そうした悲壮な左翼運動とは別に、「憩いと想ひの午後」という言葉が題字下に刷り込まれた週刊新聞『土曜日』が四条木屋町の喫茶フランソワに行けば見られたという思い出話を聞くとほっとする。「現代と恋愛」とか海外映画評といった記事に混じってスペイン内戦と人民戦線政府の動向といった記事を載せたこの小週刊紙が、当時の一般紙の空気とどれだけ異なったことか。この『土曜日』が平均四千部、多いときで八千部もさばかれたというところにも京都の社会の持つ幅広い寛容な底力を感じさせるものである⑦。

その『土曜日』や『世界文化』が「人民戦線事件」の一端として弾圧されて壊滅する一九三七年の暮、半年前に始まった中国との全面戦争はついに首都南京を陥落させたというので、日本全国では祝賀の提灯行列が行われていた。ちょうどそのころ同志社では湯浅八郎総長が辞任した。武道場に新島襄の肖像画を掲げても神棚を掲げないとか、儀式に「君が代」を歌わず賛美歌ばかりを歌っているとか、教育勅語をきちんと朗唱せず、あまつさえ総長が「誤読」したとかの批判が同志社に対してなされ、こうしたことが、同志社の容共的、自由主義的偏向の例証とされてきた。そんな状況のなかでの予科教授真下信一・新村猛両教授の治安維持法違反容疑での検挙が、もう持ち堪えられないとの湯浅総長の判断をもたらし、その辞任となったわけだが、日本国中が南京陥落の祝賀気分のときに、同志社はもっとも苦悩のときを過ごしていたことは今になれば誇っていい⑧。同じ頃に大きな犠牲を出していた南京市民を始めとする中国人民の苦痛に比すべきではないにせよ。同志社にあたる時勢の強風を避ける遮蔽物としてこの時に立てられた「皇后陛下行啓記念」の碑は、今も同志社女子部栄光館前に建っている。

与えられた「開戦」と「終戦」

京都市民の「町衆自治の伝統」なるものは、いささか伝説化され、神話化されているところがある。近世以来

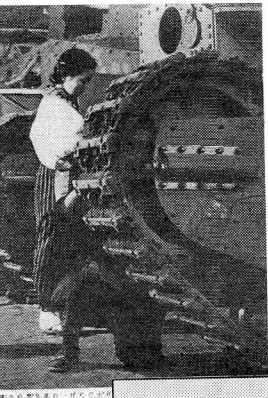


のそれは、独自の行政下請機構である京都市公同組合として近代に受け継がれている。その「自治」も、相互規制と自発的協力による権力意志の浸透化の手段として利用されていくという、市民と権力との関係での両刃の剣の役割を果たすものである。戦時下の国民統制組織として部落会・町内会が着目され、全国的に組織されるが、公同組合の伝統を持つ京都はそのモデルの一つであり、公同組合を戦時下の町内会に改組することにより、一層スムーズにこの組織化が行われたであろう。明治初年の小学校の建設や琵琶湖疏水工事費、平安神宮建営費、大正と昭和の天皇即位大典における記念事業費など、さまざまな賦課金、寄付金の募集に応えてきたこの「自治」組織は、戦時体制下においてその機能を遺憾なく発揮した。聖戦目的理解・納税義務履行・貯蓄奨励・国債応募・物資節約・防空演習・出征軍人家族慰問・心身鍛練など、行政当局では行き届かない日常生活の領域まで、国民を戦時体制に動員するに当たって大きな役割を果たしたのである。しかし京都における戦時下の町内会の実態は十分に記録されていない。「自治」と「統制」という「両刃の剣」とさえもいえない統制機構そのものだったとの証言も聞く。

八月十五日の午前中まで「建物疎開」の作業を行い続け、そのまま「玉音放送」となって半壊のままに作業中止となった現場で写された記念写真を見たことがある。太平洋戦争は天皇の名において始められ、天皇の名によってしか終わらせることができなかったが、その日本の戦争の始め方、終わらせ方にふさわしく、「終戦」の日まで建物疎開の作業をさせたものも、それを終わらせたのもお上の命令であった。試みにこの八月十五日をはさむ時期の新聞をひもといてみれば、そこに社会の大変革をうかがわせるような空気は何一つ感じることはできないし、人民が抑圧の体制から満を持して立ち上がったといったこともうかがうことができない。敗戦直後の『京都新聞』には、たとえば京都府警察部長談話を掲載して、府内の治安は維持されていること、軽挙妄動を慎み、臥薪嘗胆、日本再建への覚悟を新たにすることが「大御心」にかなうとの訓示をたれている。八月下旬には三万人もの中学生の御所清掃奉仕のことが報じられているが、その動員体制と行動パターンは戦時下のそれと異なるものではない。やがて府下各町村では、郷土出身戦没者の慰霊祭が次々と挙行されるが、地元の神社で、町村長など、戦時下そのまま変わらない行政責任者の手で執り行われている。違うのは「聖戦貫徹」「大東亜共栄圏の理想貫徹」といったスローガンが「平和国家の樹立」といったものに変わったことだけであったといえる。

「あなうれし　とにもかくにも生きのびて　戦ひやめるけふの日にあふ」という戦争が終わった解放感をうたった河上肇のような知識人がいなかったわけではない。し

かしほとんどの国民は虚脱感とある種の安堵感でもって「与えられた終戦」を受け止めていった。混乱とか熱狂とか歓喜といったものとは程遠いのが、日本の敗戦の日々であり、京都もいささかもその例外ではない。在日朝鮮人の集落のみが解放の熱気で敗戦を迎えたとの証言があるが、京都の新聞でその空気を伝える記事は見付け得ない。戦後の「民主化」の躍動的空気が新聞紙面に感じられてくるのは一九四五年も晩秋となる時期、つまり占領軍が進駐して一呼吸も、二呼吸もしたあとのことである⑨。



一、金鵄輝く日本の・
栄ある光身にうけて
いまこそ祝へこの朝
紀元は二千六百年
あゝ一億の胸はなる

二、歓喜あふるるこの土を
しつかとわれら踏みしめて
はるかに仰ぐ大御言
紀元は二千六百年
あゝ肇國の雲青し

三、荒ぶ世界に唯一つ
ゆるがぬ御代に生ひ立ちし
感謝は清き火と燃えて
紀元は二千六百年
あゝ報國の血は勇む

「紀元二千六百年」

戦後も子どもたちは、この歌で"ゴムとび"をしたものである。

文献案内を兼ねた注釈

①京都空襲を記録する会『かくされていた空襲』（1974年、汐文社）。この時期の空襲記録運動蓄積のうえに、その集大成として『日本の空襲』全十巻が刊行された（1980～81年 三省堂）。

②吉田守男「京都・奈良は何故空襲を免れたか」（『世界』1993年5月号）

③『伏見酒造組合誌』（1955年）、『西陣織物館記』（1960年）など大部の業界史での叙述はいずれも当該業界にもたらされた戦争のマイナス面を強調している。

④池田一郎・鈴木哲也『京都の「戦争遺跡」をめぐる』（機関紙共同出版、1991年）は府下全域に残る戦争の痕跡を足で書いたものである。

⑤江口圭一「満州事変と排外主義の形成」（『日本帝国主義史論』青木書店、1975年）

⑥この時期の「京大ケルン」など左翼学生運動につき『暗い絵』のモデルのひとり布施杜生の遺稿集『鼓動』（1978年、永田書店）や関係者であった小野義彦の自伝『「昭和史」を生きて』（1985年、三一書房）がある。松田道雄『京の街かどから』（1968年、筑摩書房）には官憲の目の届きにくい読書会の会場として近衛通の楽友会館のことに触れている。

⑦『土曜日』の発行に携わった斎藤雷太郎への聞き書きをまとめた伊藤俊也『幻の「スタジオ通信」へ』（1978年、れんが書房新社）がある。

⑧前二項に続きこの項も関係者の回顧録は多いが、代表として和田洋一『私の昭和史』（1976年、小学館）をあげておく。『同志社百年史』通史編二（1976年）の当該箇所も和田の執筆にかかる。なお取締側が残した記録として『人民戦線と文化運動』（司法省『思想研究資料特輯』第七七号、1939年、復刻東洋文化社、1973年）がある。

⑨京都の近現代の通史としては『京都の歴史』第八～九巻（京都市、1975～76年）、CDI編『古都の近代百年』（1975年、講談社現代新書）や各市町村史など多数がある。

座談会 我が青春に悔いあり

学徒動員マーク

―― 学徒勤労動員の記憶 ――

敗色濃い1944（昭和19）年3月、決戦非常措置要綱に基づく学徒実施要領が決定された。これは、男子総人口の1割に達する398万人が軍隊に動員されたことで熟練工が少なくなり、徴用工や女子挺身隊を投入してもまだ軍需生産力が不足していたために、在学中の学生生徒（11歳以上）を駆り出そうとするものであった。その結果、310万人の学生生徒が、勤労動員され、中等学校の場合は80％を越える動員率であった。

座談会には、この年の7月5日から敗戦まで愛知県半田市の中島飛行場に動員された、当時京都第三中学校の3年生だった**酒井寛太さん**、**池田敏彦さん**、**高宮守さん**、**西村武美さん**、同年8月11日、同志社高校女子部の4年生の時に伊丹市の三菱電気に動員された**小野恵美子さん**と**下村瑠璃子さん**、京都市立二条高等女学校の3年生で、同4月から学校工場で航空機のレンズ磨きをしていた**西田久子さん**に出席していただいた。皆さんの14歳、15歳、16歳の時の体験である。

京都第三中学校は三年生から動員された

酒井　私たちが半田で造っていたのは「天山」という艦上攻撃機と「彩雲」という艦上偵察機でした。「新池寮」という寮に入ったのですが、行ってみたらバラック建て。十五畳一間に十五人という状態でした。そこから工場まで二キロ、ワラジで歩いて行くのです。

池田　私とこの学校だけが三年生からやらされまして、一学年三百人弱として三学年全部で九百人くらいですか。校長が京都府の委員会にいい格好をしたんやという話ですね。

酒井　京都以外では、鹿児島、山梨からも来ていました。わりにいい学校から来てましたね。群馬の中島飛行機の工員の人たちも一緒でしたよ。

池田　他には、徴用で来られた人たちですね。

西村　生徒の場合はもう強制でしたね。意志を聞くなんて全然ないです、病気の場合を除いて。

高宮　一部隊バーッと学徒動員のお召し列車で……（笑）。

池田　新池寮に着きましたら、厨房で赤い飯が見えましてね、「赤飯炊いてるんや」と喜びましたが、コーリャン飯やった。

僕らは飛行機の組立てを部分的にやってたんだと思うんですけども、私がしてましたのは「彩雲」の窓をビス

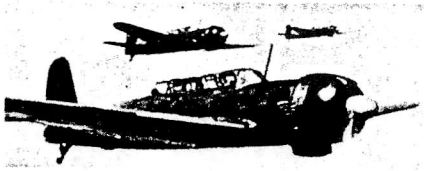
で止めるというような、しょうもない仕事でした（笑）。

酒井　初めはジュラルミンがありましたが、最後は胴体がブリキになったんですよ。翼だけジュラルミンで。工員さんはブリキの方が丈夫や言うんですが、それだけはおかしいなと思いましたね。

高宮　飛行機は、もっと奇麗なもんやと思うとったら、リベットの穴とかデコボコだらけでしょ。

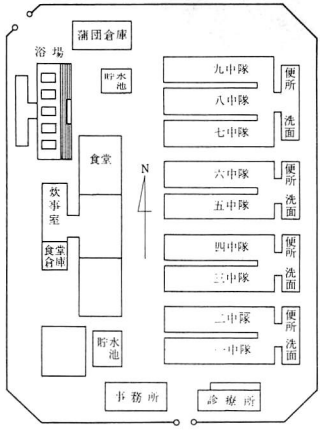
酒井　それに、今で言うたらハイテクかなんか知らんけど、再新鋭機を工場から飛行場まで運んで行くのが、なんと牛車なんですよ。その上にスダレがぶら下げてあってね。

高宮　一応あれ機密保持やったから。それが町中を歩いて行くわけやからね（笑）。



艦上攻撃機「天山」

新池寮配置図



三菱電気への動員

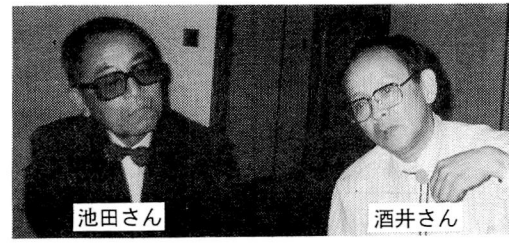
小野　昭和十九年になって、いつ頃からかはよく分からないですけど、何か動員に行かなくちゃいけないということがみんなの話題の中心でした。勉強がちっとも身につかなかったですね。家にはどのぐらいの割で帰してもらえるだろうか、勉強させてくれるだろうか、何時帰って来られるんだろうかと。そういうことを先生に聞いても、先生はご存知ない。しかも、校長先生は父母会を開いて、子どもたちが家を懐かしむから手紙を書かないで欲しい、というようなことを言ったらしいです。面会もいけないということでした。

寮は「殉国寮」という名前でした。塚口駅から歩いて来ますと、突如としてバーッと木造の二階建ての寮が並んでいて、ものすごく威圧されたんです。その中の一番北の端が殉国寮でした。私たちのために建てたというんではなくて古かったですね。

同志社高校女子部からは四年生だけが行きました。一学年二百人のうち百五十人弱でしょうか、体の具合の悪い人もいましたから。

京都は八校から来ていました。それに園田女学校、伊丹女学校、神戸工商からも。

適性検査で工場に配置されると、女子挺身隊さんや工



員さんがおられて、その人たちに教えてもらって私たちは羅針機とか飛行機の操縦室に並んでいるような精密機械を作ったんです。出来上がったものを軍人がきて検査するんです。その時は皆ピリピリしましたね。

親の面会も許されない

下村　同志社だけだったんですって、面会がダメだったのは。

小野　帰ることもなかなかできません。日記を見ますと、いつ頃からか、早出と遅出がありまして、早出の場合は朝六時頃からで、早出が何日か続くと家に帰れるんです。

下村　一晩泊まれたね。

小野　でも月に一回ぐらいしか帰れなかった。

高宮　我々の場合は、全然。「父、病気」やとか「ばあさん危篤」とか言うて電報を打たすんです。お正月もありません。第一、汽車に乗って帰る小遣いもない。空襲で危ないこともあるし、切符がとれなかったね。

小野　私らはお正月は一応帰ったりしました。

酒井　お食事は？　我々はコーリャン飯だったけど。

小野　もちろんそうです。

酒井　それだけでは足りないので、工場に行く道中でね、エビ煎餅とか芋スルメとか買うんですよ。

西村　班ごとでね、誰かを食料の買い出しに出すんです。で、確認の時に代返をやる。教師も分かってるんやけどそれで通すんです。

酒井　私の方は「出門書」というのを偽造しましてね、工場へ行くような顔をしてね……。本物の出門書は木の札に焼き印が押してあるんです。

池田　それと食券の偽造。食券には紙に日にちと、朝・昼・夕とが書いてあるんです。で、それを継ぎ接ぎして張り合わすわけです。裏みたらいっぺんにわかるわけですわ、テープでぺたっと張ってあるからね（笑）。

高宮　食券はみなが偽造するもんですから時々変わるんです。今度はカードに判を押しだしたんです。そうするとまた考えるもんですね、ロウを塗るんです。そこに使用済みの判を押されると、それをナイフで削るんです。

下村　私らは、家に帰って大豆の煎ったものを缶に入れて持って来て、それだけがおやつだったね。

小野　そうそう、ワラで作ったようなお饅頭みたいなのを工場の中で売っててね、それを今日は五つ食べたとか

六つ食べたとか言ってたね。

食事の内容については、私の日記には「犬が食べるよりもひどいものがでた。一体私たちはお国のために働いているというのに何なのだ」と、憤慨して書いてありますね（笑）。

池田　それだけ批判してあったらもう立派なもんや。僕なんかそんなこと思わんと、もうおなか減って、食べることとサボることだけでね……（笑）。

学校工場で一日中レンズ磨き

西田　高野に島津の工場があったんですが、そっちがもう入りきらなかったのか、私は学校工場で働きました。レンズ磨きですから空気のきれいなとこじゃないとあきませんから、みな机とかをお片付けして、レンズを磨くんですよ。水平にして顕微鏡みたいなので検査して、光線のラインが真っすぐになってるとレンズが平行だと言うことで合格。それがいくつできるかという数をものすごく言われるんですよ。競争なんですよ。クラス全部ですから五十人、三年生全員で三百人がやっていました。

朝は教練みたいなのがありましてね、二条城の周りを裸足で走りまして、それからハチマキをしめて、決戦服を着てレンズを磨くんです。八時頃から五時頃まではやっておりましたね。勉強するより、レンズが何個合格するかで一生懸命でしたね。で、いまだにクラス会をしますとね、あんたは不器用であんまり成績がようなかったね、私はこうだったのよとかね。毎日レンズ磨きで、その他のものはいらった覚えはございません。

顕微鏡が恐かったですね。指導に来る島津の工員さんたちが偉そうにしてて、その人たちにオベッカ使うでしょ、それでものすごく悲しい思いをしました。

わずかな報奨金が出た

高宮　報奨金か何か、月給が五十円ぐらい出てたはずや。学費を差し引いて、その中から十円だけがもらえた。残りは郵便貯金になっとって、最後に動員が終わってからもろたな。

西村　でも戦後すぐインフレでしょ。だからその金を出しに行った時は何の値打ちもなかったですよ。

酒井　家に「金送れ」と言うて何回も泣きついた記憶が

ある。

西村　そりゃ十円では足りないよ。雑炊が五十銭とかしたから。

ほとんど裸足のような毎日

池田　ワラ草履を履いていましてね、それが半分ぐらいすり減ってもまだ履いとるんです。

酒井　ほとんど裸足同然ですよ。草履のシンのところだけが残っていて。

高宮　途中、牛のワラジが脱げたりしてると、そっちの方がしっかりしとったりしてね。

池田　そのワラジも配給ではなく、買うんですよ。

小野　同志社の場合、配給にね、ひまわりの種とかビタミン剤とか、そういうふうなものが思い出したようにありましたね。皆勤賞の人には、どうしてでしょう、日傘をくれました。塗りのゲタもありましたね。あれはゲタ屋さんから供出されるんでしょうか、思いもかけないものが時々配給されました。

池田　皆タバコを吸うんですわ。キセルときざみで。タバコを吸うということが先生も分かっとるんですが、怒らへんかったね。

西村　ただ寮の部屋ではだれも吸わなかった。喫煙室みたいな所へ行ってね。

高宮　お風呂は共同浴場みたいなものでした。

下村　後の方で入るとキタナイ、キタナイ。で、電気で沸かしてるからビリビリッと感電したりして。

池田　ノミ、シラミはすごかったね。ゲートル巻いてるから、ノミは逃げ場がなくて中でポコポコ動くんですよ。

酒井　シラミはベルトの所におるんです。痒いと思うたらそこにおる。でもノミは飛んで行きますからね。

高宮　ゲートルとったらシラミが圧死しとった（笑）。

下村　頭の毛にシラミがいっぱいわいたね。

小野　私の日記に、「最初の日の十一時頃着いて大掃除した。畳をあげてノミ取り粉をまいてきれいにしたがやはりノミが出てきて、それから何週間もノミで寝れなかった」とか、「お布団中全部ノミ取り粉で真っ白にして、体もみな真っ白にして、カヤのふちの人は蚊にかまれるから可哀想だから順番に寝る場所を代わった」とか、いろいろ書いてますね。

のみとり３態（斎藤勇君のスケッチから）

読売新聞社・学徒動労動員の記録
「紅の血は燃ゆる」から

高宮　赤チンで食われたあとを勘定するんです（笑）。家に帰るとまずそこで裸になれと言われて、すぐにはあげてもらえなかった。

一九四四年十二月七日の東南海大地震

酒井　午後一時三十六分に突然起きました。昼ご飯を食べてから、整備工場に行って電気のスイッチを入れたとたん、グラグラときたんです。かなりひどかったですよ。地割れがしてそこから水がバーッと吹き出しました、海に近いですから。

高宮　私らの学校では四年生が十三名亡くなりました。

酒井　後から聞きますと、グラグラときてすぐ出た人はどうもなかったんです。次の揺れの時に出た人は塀が倒れて圧死ですわ。工具の下におった人は助かってるらしいです。

高宮　全体で百五十三人亡くなられたかな。そのうち動員学徒は九十六人。

奉仕するとかしないとか考えるゆとりはなかった

小野　ただ行ってるだけで、奉仕するとかしないとか考えるゆとりはなかったですね。戦争で、それが大変であるとかないとか言う前に空腹だけですから。

三菱電気は結果的に爆撃はなかっただけで、もう今日やられる今日やられるという日ばっかりでしたよ。

高宮　夜は寝るだけ。それと日記を書いたりもしてたな。入って初めは勉強をやってたな、授業もね。

小野　疲れてるしお腹はすいてるし、なんでそんなん勉強せんならんの（笑）。

西村　ちょうど色気ざかりの頃だったと思うけど、疲れと食べることで、もう色気どころではない（笑）。

高宮　食券の偽造に忙しかったしね。

下村　私らは早い時間から寝させましたね。

小野　夜は何をしてたんでしょうね。くたびれてベチャベチャしゃべってたんでしょうか。床の間みたいなとこに本が積んであったんで、それを一冊だけ読んだ記憶はありますけど。

西陣織帯地卸
和装小物創作
子供和装品の製造
アパレル製品製造
株式会社
丸　池
〒602
京都市上京区堀川通一条上ル
TEL 075-431-3381
FAX 075-431-3379

全国学徒動員数　（1945年3月現在　単位千人）

種別	区分	学徒数	動員学徒数 軍需産業	食糧増産	防空防衛	重要研究	計	動員比率（%）
大学高専（教員養成学校を含む）	男	228	110	20	15	2	147	64.5
	女	53	27	5	1	0	33	62.3
	計	281	137	25	16	2	180	64.1
中等学校	男	1,189	669	165	106	—	940	78.0
	女	800	551	115	23	—	689	86.1
	計	1,989	1,220	280	129	—	1,629	81.9
国民学校高等科	男	1,186	328	362	—	—	690	58.2
	女	1,029	259	348	—	—	607	59.0
	計	2,215	587	710	—	—	1,297	58.6
合計	男	2,603	1,107	547	121	2	1,777	68.3
	女	1,882	837	468	24	0	1,329	70.6
	計	4,485	1,944	1,015	145	2	3,106	69.2

注　文部省「学制八十年史」による。

艦上偵察機「彩雲」

病気になって熱を出した人があると、その人のおでこをさわらせてもらって。寒いですから暖房の代わりにね（笑）。で、病気の人がいない時は電球で手を暖めて。

酒井　今思いますとね、思春期の真っ只中でしょ。アイデンティティの確立を目指して、将来の職業とか結婚の選択をやらんならん時期でしょ。でもそれは全然考えへんかったな。

小野　私らもいつ死んでもいいと思って生きてました。

玉音放送より食料の買い出し

酒井　終戦の日はみんな新池寮に集められて玉音放送を聞きましたよ。耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍びでしょ。後は何言うてるか分からへんのです。みな陰では天ちゃん言うてましたけど、天ちゃんが頑張れ言うてはるんやなと（笑）。

池田　聞くことは聞いたんですが、その日の買い出しの当番の人が「ちょっと行ってきます」言うてね。それよりも買い出しに行くことの方が大事やったんです（笑）。

酒井　誰も玉音放送の解説はしないです。それどころかその翌日デマが飛びましてね、今東京に敵艦が来たとか。

高宮　負けたという事が分かったのは、あれは実感ですね。後でなんとなく。それからはカーテンを開けろです。灯火管制ですから。仕事も、もう今日はあらへん言うてやめてしもたんです。

池田　以前からもうずっと爆撃でやられてますから、実際の仕事はなかったね。

酒井　八月二十二日には帰ってよいということになりました。

池田　みな一緒に帰って来ました。

小野　私の場合、お昼に放送があるからということで、同志社の有修館の前に並んだんです。みんなでゴチャゴチャ話してたら、先生ばかりが必死な顔して走って来られて、私たちは何か分からないままにまた女子部に戻りました。

午後からプールがないというので非常に残念な思いをして電車に乗りましたら、電車の中の人が戦争に負けたというような話をしてる。ものすごく不思議な気がしました。戦争がなくなったのにまだ景色が同じようにあるのが印象的でしたね。負けるとか負けないとか言うより、戦争が終わっただけのことで。なにしろ負けるというのは今まで聞いたこともないし、考えられなかった。だけど勝つことだけは、これは絶対ないと思ってました。

下村　いつまで続くのかしらという思いはありましたね。

西田　私の場合も学校で全員が玉音放送を聞きましたが、先生が説明したのか、すぐに日本が負けたことが分かってみんな泣き崩れましたね。

我が青春に悔いあり

高宮　考えてみたら我々の学力、二年生どまりみたいなとこあるからなあ。

池田　私の場合はその劣等感でずっと来て、そのいい加減さのままで生きてきてるさかいね（笑）。

西村　僕は帰った年は学校へ行く気が起こらなかったんです。そしたら先生が家まで来て、とにかく学校へ戻れと。その先生がいたお蔭で今の私があると思います。

高宮　僕ら動員組が帰って来たら最上級生やった。でも誰も朝礼に並ばなんだ。みな砂場の方へ集まって。最上級生やけど、よそ者のような感じですね。あぶれ者みたいな感じでいたのを強烈に覚えてます。

小野　私は七月から女専に行ったでしょ。八月十五日が来て、家庭的、経済的な問題もありまして、それ以降は学校へ行っていないんです。弟も妹もいましたしね。退学したという思いと、三年間しか勉強してないという思いとが二つあって、悔しかったという思いがいまだにずっとありますね。

下村　私もいまだにありますね。

小野　私は実は中学校を卒業してると思ってたんです。ところが、三十歳頃にまた勉強しようと思って学校に問い合わせたら、あなたたちは四年を終了しているが卒業はしていない、今大学に行くには五年生まで行った資格が必要だと言うんです。ショックを受けました。だから大学に行くのをやめてフリーで好きなことだけ勉強して来ました。

西田　私はね、一、二年まで英語がありましたが、その発音が今でいう初級の英語ですね。で、三年生になって、英語を使うたらいかんということになりましてね、音楽もドイツ語で発音するんですよ。だから英語の発音がものすごく駄目だったですね。

酒井　我々の青春に悔いなし、というのがあるけど、大いに悔いがあるな。

（記録・松田普美子　まとめ・折田泰宏）

特集 戦時期の京都

西堀川通りの立退き

――今堀静江さん（85歳）に聞く――

山内邦子

私のうちは西堀川出水上るで、「鍵屋」という乾物屋をしてました。せまい通りの向かいにもお店が並び、そのま裏に堀川が流れ、その横に京都ではじめて走ったチンチン電車、そのむこうが堀川通りでした。今ではそれがみんなひとつになって大きな堀川通りになってます。

西堀川通りの中立売から丸太町までは「堀川京極」といわれたにぎやかな商店街でした。私、ひとり娘やったから婿さんにきてもろて、それまで苦労らしいもの知らんときたんです。戦争が激しなってきた頃は、七人程いた店の人もみんな戦争にいってしもて、主人も招集されて、店の方は父ががんばってたけど、仕入れの品物も軒数による割り当てとかでだんだんむつかしくなっていた様です。店も閉めなあかんかなと言ってた頃、今から思えば終戦の年の二月二十六日、父が亡くなりました。

父は日頃から「死んだら寝棺で送ってや」と言ってたけど、当時は贅沢品や、どうしたもんかと思ってたら、同じ時期橋本関雪さんが亡くなられてお弟子さん達が走りまわって寝棺を調達されたそう。でもそれが二つ重なってしもたとかで、そのひとつを父の方へ分けてもらうことができました。変な話ですんません、でも最後の頼み聞いてあげられてよかったなと思いましたワ。

その一週間後の三月三日に私、五人目の子供を産みました。それから三日ぐらいたって産後でまだ寝ていた時、町内の組長さんがこられて五日以内に家を立ち退くようにいわれました。

強制立ち退きの話は聞いてはいたけど、まさか自分とこに回ってくるなんておもてへん。お上の命令にさからえる時代ではなかったし、とりあえず丸太町の知り合いの材木屋さんの倉庫に荷物の大半を預けて、私らは玄琢のおばをたよっていきました。私は六歳のとき母に死なれ、母は私のことをこのおばに頼んだそうです。おばは「死んだ人とは約束したらあかんな」と言いながら、ほんとによくしてくれた。

これだけは忘れられへん。その時国からもろたお金が五千七百円！。いくら当時とはいえ便所ひとつ建たへんかった。八十五坪あったわりと大きい家やったんヨ。一週間程たって見にいったらすっかり壊されてて、残しておいてと頼んだ家具も冷蔵庫もどこへいったか、わからへんかった。

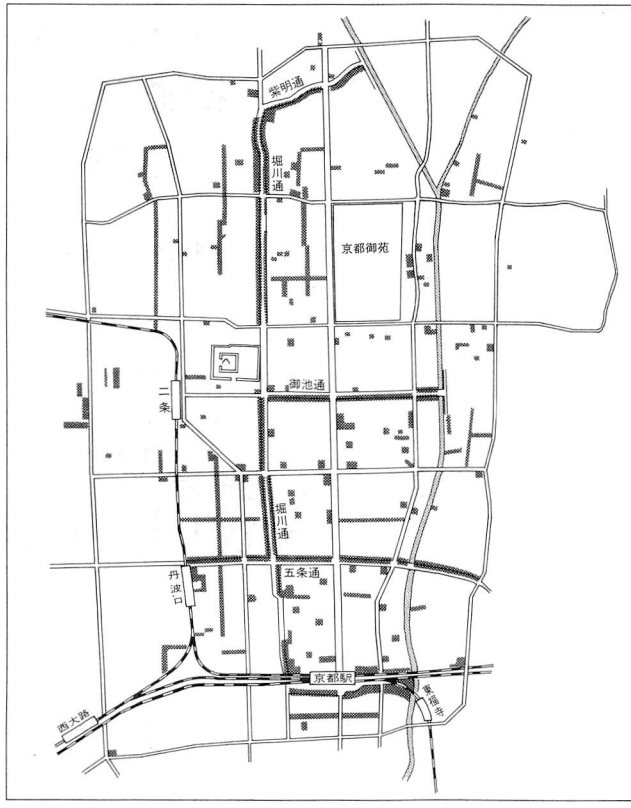
それからは売れるものはみな売りました。着物三十五枚で米二俵やったんおぼえています。五条のいとこも同じ様な目にあってます。ここらへん（伏見深草の商店街）はちょっとのことで助からはったと聞いています。

ほんま、もう半年あとやったらナ。でもその当時は、そんなこと考えてる余裕あらへん、食べていかんならん。私、自分でもよう働いたと思います。今では苦労した子供らも自分の生活楽しむようになりました。これからは孫たちの時代やしね。

戦争ではなにもかも失くしてしもたけど今の私、なんも言うことない、一所懸命やってきた、これが私の財産ですし。

建物疎開一般図

1945（昭和20）年



『京都府百年の資料』より

京都府・市は、1944（昭19）年7月から終戦時まで、3次にわたって防空緊急対策として、重要工場の周辺及び家屋密集地帯等を対象に、計167ヵ所133ha（401,463坪）、11,706戸を建物疎開（強制立ち退き）を実施した。

第4次のそれは、終戦の年8月5日から行われ、174ヵ所86haにわたって実施される予定の大規模なものであったが、敗戦により中断された。8月15日「玉音放送」直前まで建物取り壊し作業は行われていた。

上図のごとく、紫明通・堀川通・御池通・五条通等は、この建物疎開によって拡幅されたものである。

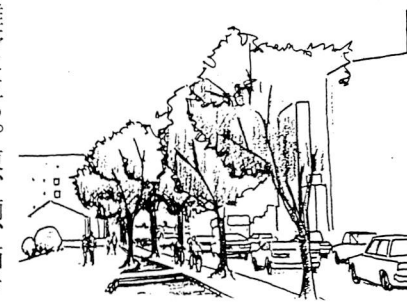
京都TOMORROWバックナンバーのご案内

VOL.2 第1号 特集：地域考・京に棲む
第2号 京の樹木に会う
第3号 追跡・京都の町内会
第4号 これも京都“深夜”を探る
第5号 老人ケアのゆくえ
——死ぬまで京都でくらしたい
第6号 検証・バブル現象を京都に見る
——バブルなんてくそくらえ！

こだわりつづけたい御池通り

八歳の記憶

山本時子（無職）



御池通河原町のかかりの分離帯に立つ。東、南、西を眺める。目にうつる東山連峰を背に木屋町の家々、分離帯でなく市電御池のうすっぺらい停留所が近くに。南の本能寺の静かなたたずまいを寺町へ。御池通りを西日がまっすぐに京都ホテルの西南角の壁にさし、かたわらのうるしの葉を染める。

市役所の正面の階段をかけおりて南側へたどりつくまでの距離は、子ども足でもほんのわずかの歩数。忘れられない景色がよみ返る。

一九四四・七、第一次建物疎開始まる。（第十六師団本隊玉砕）

京都の百年を写真で見る本の裏に記載されていた一行。胸がつまった。

「建物疎開」こんな言葉で、軍は楽しい暮らしを一瞬にして奪った。

自分の家の消失を目の前にして、いつまでも泣いてられた人。京都ホテルはそのままで、東から順番に強制立退きがはじまり、最初の頃の立退きだった。弟や妹と共に私がこの世に生を受けた産院の奥さんだったと聞き、今自分がこの世にいる事が不思議に思えた。

幼き日の遠い記憶は、一日一日の体験が孤立してよみがえる。その日もとても天気の良いさわやかな日だった。

いつも天気の良い日は大屋根に布団を干し、その上に寝ころんで日光浴をする私のならわしは、隣家のおばさんをハラハラさせていた。よく境目より顔をのぞかせ声をかけられた。

家との別れを屋根の上で食事をしながら、最も心に残るやり方で父と小時間を過ごした。

強制疎開は個別にでなく「トントントンカラリと隣組、障子を開けてやった来た」。

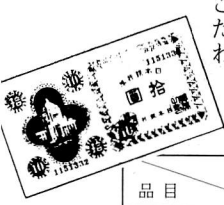
本当にこれでとおった時代。猶余は半月位だったとか。商売をし、小さな子どもがいるところも多かったのに、どうすれば良いかはすべて疎開で追いたてられる側に負わされていた。

いつもひまな子どもは「切符」を手に大人の間に順番を抜かれないように、どきどきして並んだ店、きれいな洋服をウインドーに飾っていた店、タバコ屋さん、弟につきそって行った歯医者さん、なつかしい路地。みんな

動員された可愛いい学生が家の大黒柱に綱を結び引き倒した。子ども心に不思議なくらい作業している学生に憎しみはわかなかった。

今御池通りに来て市役所を見て不可解なのは寺町通と市役所の西端の距離、あの道幅はいざと言う時市民の避難の役に立つ幅でも、市役所が燃えた時の消火活動をするにも役立たないだろう。なぜなぜ。疎開の進行と敗戦の時間差だったと聞いたが……。

こだわってもこだわっても何もかも過去におしやられて、世は建都一二〇〇年、ほんの半世紀前のでき事も、一二〇〇年の中で消えて行く。戦争は負けても勝っても〇年〇月〇日で終わるが、それぞれの身に心に受けたもろもろの物はほとんど伝えられる事なくほうむられて行く。だからこそ無理なくいつまでもこだわりつづけたい御池通。



戦時期の物価表

「値段の風俗史」週間朝日編より

品目＼年	1937（昭12）	1938（昭13）	1939（昭14）	1940（昭15）	1941（昭16）	1942（昭17）	1943（昭18）	1944（昭19）	1945（昭20）	1946（昭21）
豆腐1丁		6銭				7銭		10銭	20銭	（'47年1円）
にぎり寿司並1人前				30銭			（'43年から'45年まで統制のため営業中止）			
牛肉　中100グラム	41銭							46銭	80銭	6円
ビール大　ビン1本	37銭	（'40年から'49年まで配給制）57銭					90銭	1円30銭	2円	6円
タバコ　ゴールデンバット			9銭		10銭		15銭		35銭	1円
背広　英国製仕立て	45円		70円			80円			1,000円	
ゆかた			3円50銭		（戦時中は統制価格）					
"花嫁"ふとん	130円				（統制のため販売中止）					
裁ちバサミ						3円		（営業中止）		
スキン　1ダース	30銭		30銭		（統制品として、ほとんど軍需関係に納入）					
目薬　1ビン					20銭	（'45年から'51年まで統制価格）80銭				3円
ガソリン　1ℓ	15銭	（'40年から'52年まで公定価格）22銭				31銭				1円20銭
タクシー　2㎞		30銭	（メーター表示の5割増）			80銭			100円	
京都市電							10銭（均一制の料金実施）			30銭
公衆電話　1通話					5銭			10銭		20銭
映画館			55銭			80銭			1円	3円
新聞代（月決め）					1円20銭		（朝刊のみ）1円30銭		2円70銭	5円
岩波文庫	1927年創刊より20銭						材料不足とインフレ激化で個別定価			
大学授業料（慶応）					160円			200円		700円
散髪代					55銭		80銭		3円50銭	3円
パーマネント		5円～7円50銭（'40年より「パーマはやめましょう」運動、翌年禁止）								
粉おしろい　1個			80銭				1円10銭		4円50銭（統制価格）	
自転車			80円～100円						200円	985円
野球ボール　1個	1円50銭		1円70銭			3円				
電球　60ワット					40銭（'41年から'48年まで統制価格）51銭				98銭→6円	7円65銭
マッチ　並10個入り		12銭（38'年から'49年まで公定価格）						50銭	1円50銭	3円
金　1グラム	3円84銭			4円61銭					4円80銭	17円
小学校教員初任給					50円～60円					300円～500円
郵便料金20グラムまで	4銭					5銭		7銭	10銭	30銭

特集

戦時下の喫茶店と『土曜日』

フランス人民戦線の機関紙「ヴァンドルディ」（金曜日）の日本語版とも言える『土曜日』が発行されたのは一九三六（昭和十一）年七月四日。

小学四年を中途退学した斎藤雷太郎（当時、松竹下加茂撮影所の俳優）によって発行されたこの『土曜日』は同志社大教授でマルクス経済学者の林要、元同志社大民法の教授で、弁護士の能勢克男らが編集にあたり、美学者中井正一が協力。なお、新村猛、久野収、長広敏雄、辻部政太郎らの「世界文化」の同人も執筆に協力した。

一九三七（昭和十二）年十一月終刊するまで、発行部数最高八千部にまで売れゆきをのばし、反ファシズムの抵抗運動としての役割を果たした。

タブロイド版、六ページ、一部三銭。月二回、第一、第三土曜日に発行され、京都市内の喫茶店などで多くの読者を獲得した。『土曜日』は学者文化人の啓蒙原稿だけではなく、読者に寄稿してもらいどんどん紙面に載せる「読者参加の新聞」でもあった。軍国主義的色彩が濃くなる一方の暗い時代、人権の尊重や言論の自由の思想が静かに新聞編集の底に流れていた。世相を露骨に攻撃はしないけれど、皮肉るという特色をもち、誰にでも親しみやすい良心的な商業新聞であった。

当時『土曜日』を買い取り、お店に置いていた喫茶店フランソワの立野留志子（七十四歳）さんに、戦時中の頃のお話を伺った。

昭和九年九月でしたか、画学生でした主人が絵描きをあきらめて、他のことで食べて行こうということで喫茶店を始めました。音楽喫茶は珍しいということで、ファンも増え、十一時に店を開けると、三高生、京大生、それから同志社や美大の学生さんたちでいっぱいでした。

当時、コーヒーは他の店で十銭、うちは十五銭いただいておりました。名曲喫茶ということで。

青春時代の娯楽はあの頃何もありませんし、学生さんには喫茶店巡りが娯楽でしたね。ここへ来たら誰かに会えるということで、一時間、二時間いらっしゃる方がザラでした。

レコードはビクターから新しいレコードが出ますと、一番に試作品を持って来ます。一週間かけて曲を選びました。ほとんどクラシックばかりでしたが、しばらくしてシャンソンも……。メニューはコーヒー、紅茶、カルピス、ポートラップ（ブドウのジュース）、神戸から取り寄せて、ユーハイムのケーキも置いていました。それ

から映画関係の方のために洋酒も。

当時は今みたいに男の人のバイトを使うことができませんし、知り合いのお嬢さんに来ていただきましたが、お店で働いてもらう人には苦労しました。女の子は着物の上にシャレた柄物のエプロン姿でした。

昭和十一年頃ですか、『土曜日』という新聞を斎藤雷太郎さんに頼まれて、二百部買い取ってお店に置いていました。斎藤さんがご自分で自転車で配達されました。一部三銭でしたが、広告料は五円で、結構高かったです。

二百部はたちまちなくなりました。「夏休みに郷里へ帰るから『土曜日』を送ってほしい」という学生さんに送料フランソワ持ちで送ってあげたこともあります。当時、竜谷大の学生さんでした。今でも、その方からその頃のお礼と言って北海道千歳空港からスズランが届きます。その方は今、七十五か七十六歳でしょうか。お坊さんやそうです。

『土曜日』を楽しみにしている兵隊さんもいましたね。『土曜日』はなかなか人気がありました。誰が読んでも読み易く、映画評論からファッションまでのテーマをいろんな方が書かれました。

その頃です。一日三回位、特高が学生狩りに来ました。「こんな非常時に、昼間から音楽を聴いているのは何事や!」と。妹さんを連れて来ていても「ふしだら」と言われました。

昭和十二年七月に、主人も治安維持法でひっかかりました。共産党シンパで。私が川端署へお弁当の差し入れに行きました時、刑事が『土曜日も……』と言っていましたので、帰りましてからすぐ能勢先生の所へ連絡を入れました。

斎藤さんは肩書もなく特高もあまり注目しなかったのでしょうか、すぐ釈放されたようですが、他の人たちはみんな挙げられて行きました。

それからだんだんコーヒーも入りにくくなり大豆との混合になりました。また砂糖も配給で。うちの店は本物の砂糖を使っていましたが、普通の家庭はズルチンとかの代用でした。また、台湾から干しバナナが入りまして、主人が神戸の倉庫へトラックをチャーターして取りに行きました。翌朝、空襲でその倉庫が焼けたということです。その干しバナナ二本に番茶をつけて出しました。干しバナナは珍しいでしょう。四条小橋まで人が並ばはりました。その干しバナナも売り切れ、昭和十六年お店を閉めました。昭和二十二年にまた再開しましたけれど。

私たちは早く戦争が終わってほしいと思っていました。戦争が始まった時から負けるに決まっていると思っていましたから。そんなことうっかり言ったら引っぱられますから話しませんでしたが。一般の人は日本がどうなるかということよりも、食べることで精いっぱいでしたね。

（塚崎美和子）

特集

戦時の工場・結婚・出産そして夫の戦病死——田村静枝さん（71歳）に聞く

ベビー服と兵服を縫って

西江州から京の親類を頼って、繊維雑貨の会社へ洋裁見習いに入りましたのは昭和十六年、あてが確かハタチの時どした。ベビー服ばっかり毎日々々、そらたーくさん縫いましたえ。〝生めや増やせ〟の時代や、会社の景気はウナギ上りで、姉小路のお寺を借りたり釜座や一乗寺の民家を買い取って、工場の数は増えていきました。

男はんは布地の裁断とか、マフラーやらネクタイの販売で、二条通りの本宅には百何人という男の社員やミシンの女工が住みこんでましたな。あては釜座の方に住みこんでましたが、誰も行李一箱に布団だけの荷物。

三食付きやさかい喰うには困りまへんが、見習いの月給は五円どして、忘れもせん、あてはそのうちの三円張りこんで、菊一文字という刃物屋から気に入りのハサミを買うた。ほかに目打ちやらメジャー、洋裁道具の小物一式はみな自分持ちどしたさかい、自由な小遣いはおまへんどした。クリームなし、パーマなし、二、三枚の着物を着替えながら、その上にエプロンかけると作業着で。

しだいにベビー服から兵隊の服に移ってきましてな。ほれ軍国色の上衣とかズボン。もうこればっかりになって、それがまた縫うても縫うても、キリおへん。確か戦後四、五年経っても縫うてました。繊維の景気がドカッと悪うなったのはそのあととちがうやろか。

戦時の新婚生活

と言うてもあては、昭和十八年秋に結婚して一担ミシン畑から退きました。結婚式てしますかいな。北区小山東大野町の借家の新居に、仲人はんと両家の親と二、三の親類、総勢十人ほどでスキヤキしまして、もう夫婦。そやけど夫とゆっくり話した覚えはあらしまへん。ずんずん空襲が激しゅうなってきて、夫は会社の空襲当番でほとんど帰宅は遅い。二人暮らしには広い借家に一人いて、昼間はどもないけど日が暮れてからが気ぜわしい。空襲警報がウーウー鳴るとお便所にいてもお風呂に入ってても、すぐ出て電灯に黒い布をかぶせます。まこと腰の落ち着かん新婚生活で、夫の顔もじっくり見てる暇あらへん。ケンカしてる暇もおへん。

でもあの戦争、家にいた者からは、何ちゅうても「物がない！」、これどしたな。整理券と引き換えに販売されて、そのうち何もかも配給制で、朝から行列するのが

仕事。服や綿はおろか、針一本売ってまへん。たとえお金を持ってても使う途があらへんの。内風呂はあったけどマキがないさかい、たいていは週に一、二回開店しはるお風呂屋さんに通うてました。もっともお隣さんは、ヤミでマキを買うてはりましたけど。

ヤミゆうと、ご近所に五人の子どもさん抱えて食糧に困らはった家がありました。売れる物はみな売って、ご夫婦で農村の方へ買い出しにばかり行ってはりました。

〝出産疎開〟

お医者さんなんか行きますかいな。そやけど妊娠したらしいとわかって、出産予定の一ヵ月前、昭和十九年の七月に、言うたらあては出産疎開をしました。西江州の実家をめざして夫と二人、てくてく歩いて八瀬から大原へ、峠も越えて一日がかりで実家に着きましたが、着いた途端に寝こんでしもうて、ずっとそのまま床の人。八月五日、言うたらあては寝たきり出産したんどす。村長の奥さんがお産婆さんで、ぶじ女の子を生みました。

農村は畑があるし、タキモンがあるし、ちょっとした牧場もあって滋養にあてはミルクも飲み、ヤヤコのおしめにする古い浴衣も見つかって、そのくせ空襲がない。都会の生活よりずっと暮らしよい。体もだいぶ回復しまして産後二ヵ月め、あては夫の待つ京へ戻りました。

夫の戦病死

しかし、帰って親子三人の生活もたった四ヵ月どした。結核の気があって体の弱かった夫にもとうとう赤紙が来て、昭和二十年二月、夫は実家から出征しました。お互い同郷どす、実家は近い。出征兵士は村のお宮さんで挨拶するんどすけど、それから一里半、あても堅田まで歩いて見送っていきました。

いやあれから毎日々々、兵隊さんのお見送りばっかりどした。日に一人から二、三人は出ていかはる。それを村の関係者三十人から多い時は五十人くらいやろか、一里半の道を二列に並び、軍歌を歌うて見送るんどす。

夫は佐世保へ行ったはずやのに、まもなく鹿児島から便りが来ましてなぁ。赤ン坊は元気か、とか。そのあとも二、三回便りがきて、残ってへんので定かやおへんが、十七、十八歳の若い兵に相当蹴られたり殴られたりした毎日で、荷物を運ぶ仕事のようどした。

八月十五日、どうしてはるかと案じてたらちょうど一週間して、夫は家に帰ってきました。でも栄養失調でギンギンに全身膨れて。心臓、肝臓もみな悪うして、倒れたまま起き上がれへん。一ヵ月後に亡くなりましたがその七日前、不意にパッチリ目を開けて、しっかりした声で「ぼくは死ぬに死ねん」と言い遺しました。

（高橋幸子）

その時、大学は

特集 戦時期の京都

田畑忍

元同志社大学学長に聞く

私は、昭和二年に大学に残って、政治学と憲法専攻の助手になりました。その頃は、まだ特に暗いという感じはなかったですね。何とはなしに大正デモクラシーの良き時代が崩れつつあるような変な感じはしていましたね。

昭和二年に、海老名弾正総長が軍事教練を査閲したいと言い出した事件がありました。海老名総長は戦争の好きな牧師なんですよ。人生で一番素晴らしいものは戦争だというんですよ、そんな妙な方でした。

われわれは反対しましてね、海老名邸に押しかけて行って、そういうことはやるべきやない、と言って辞めさせたという事件がありました。しかし、海老名総長は大学自治と大学中心主義については徹底していましたね。

ところが、海老名さんは昭和三年の有終館の火災で当時御所に天皇がいらしたことで、理事会の突き上げがあり責任をとって辞任しました。

昭和四年に就任した大工原総長は大学自治を非常に尊重されました。で、この時代の教授会は実になごやかでした。右と左がいるんですけど

戦時下の大学

左翼の激化を恐れる政府は、大正十四年に京大の社会科学研究会に属する三十数名の学生を検束した。これが京都学連事件である。その後も昭和三年の三・一五事件、経済学部河上肇教授に対する辞職勧告など左翼弾圧が続いたが、大学の自治の根幹を揺るがした事件が滝川事件であった。

文部省は、昭和七年、京大法学部の滝川幸辰教授の講演の内容が危険思想であるとして問題とし、さらに同教授の著書『刑法読本』『刑法講義』を発売禁止に処した。

昭和八年四月、ついに文部省は滝川教授の辞職を要求。京大法学部教授会はこれを拒否したが、文部省は滝川休職を発令。これに抗議して法学部の教授ら四十名全員が辞表を提出した。

しかし、政府は、七月、辞表を提出していた四十名のうち、佐々木惣一、滝川幸辰らの六教授のみ依願免を発令し、京大松井総長と鳩山一郎文部大臣は、今回の処分は非常特別の場合であり、教授の進退は教授会の議を経ることを文書で確認することで「解決」してしまった。この「解決」に教授団は分裂し、多くの教

もね、対決するとか喧嘩をするというようなことはなかったんです。ところが昭和九年に大工原総長が亡くなられて、湯浅八郎博士が総長になって俄然変わったんです。

＊

湯浅さんというのは大学自治が分かるような方であって、実は分からないんです。教授会を尊重しないんです。湯浅総長が辞任する昭和十二年までの四年間というのは左右が対立してメチャクチャになり、結局湯浅さんは右の側の四名の教授、助教授の首を切り、左側の三名の首を切って、合計七名の首を切ったんです。

湯浅さんは右の圧力を抑えるために、中島今朝吾という憲兵中将が言う通りにやったんです。教育勅語をもらってくる、御真影をもらってくるというようなことをやったんです。同志社にはそれまで御真影もなければ教育勅語もなかったんです。式では賛美歌だけで教育勅語を読むというようなこともなかったです。それで式で教育勅語を読んだのはいいんですけれども、「御名御璽」（ギョメイギョジ）なんて知らないですよ。「御璽」はハンコだから言わんでいいと。「御名」をですね「オンナ」と読んだんですよ。で、みんなワッと笑いました。

反抗でそうしたのではありません。そんな反抗をするような人じゃないです。

＊

私と同期の野村重臣君というのがおりましたが、この野村君がね、田畑憲法学は最悪の憲法学であるとパンフレットに書いたんですよ。

理事会はびっくりしたんです。で、ひとつ調べようということになって、私の本を検閲することになり、東大の三宅驥一という方が検閲役となりました。その結果、最悪どころかいい憲法学だという判定がでましてね。理事会が安心したんですよ。で、私を切ることはできなくなったんです。ところが、右の方の河原政勝という

授たちは辞表を撤回し、学生たちの滝川擁護運動は弾圧された。

この事件で退官した教授たちの多くは立命館大学に迎えられたが、この滝川事件を契機に、大学は完全に軍事体制に取り込まれてしまったのである。

同志社大学の状況は田畑元学長の証言の通りである。ただし、湯浅元総長に対する田畑元総長の評価は、同志社大学から公刊されている通史と全く異なることは興味深い。

立命館大学は、総長の中川小十郎が先頭に立って「立命禁衛隊」を組織し、最も国家主義的な大学の道を歩んだ異色の大学であった。昭和十五年には角帽を廃して丸帽とし、制服を国防色に統一した。「禁衛隊」はヒューヒュードンドンと市内を警備していたという。昭和十八年四月には国防研究所を設け、六月には立命館禁衛隊「学園決戦体制」を発表し、七月には選抜学徒六百余名を江田島の海軍兵学校に入隊させた。

いずれの大学も、昭和十四年には任意であった軍事教練が必修となり、昭和十八年十月文科系学生の徴兵猶予が停止され、学徒出陣が開始された。京大では文科系学生の約八割が入隊したと言われる。戦場に散って行った学生の多くは、生きて帰らなかった。

国際法の教授と一緒に私を休職にしたんです。

休職になりましてね、湯浅さんから、東大の筧博士について憲法の勉強をやり直せ、それから国民精神文化研究所というのがありまして、そこへ行って洗脳するように言われたんです。で、私はそれは命令ですかアドバイスですかと聞きましたら、湯浅さんがアドバイスだと言ったんで、これはシメタと思ったですね。命令だったら私はいつでも辞めようと思ったんです。私は東京へ行くのは行ったんですが、国民精神文化研究所にも行かない、筧さんにもつかない。湯浅さんからはしきりに行け行けと言ってくるんです。ところが断じて私は行きませんでした。東京には一年間いました。

僕が湯浅さんの言う通りにしなかったもんですから、中島憲兵司令官は怒ったんです。湯浅さんに僕を切ってお前も辞めよという手紙をよこしたということです。そのことは湯浅先生は私には言わずに、昭和十二年の秋に、ひっそりやめてしまわれたんです。私は昭和十三年にやっと同志社に復帰して教授になりました。

＊

当時の学生は平静でしたよ、右の学生も左の学生も。ただ左の学生はですね、左側の教授の擁護運動をやっていました。和田洋一君や新村猛君とかは同志社の騒動には関係ないですね。予科の教授ですから。法学部やないんです。これは治安維持法関係で辞めたんです。

昭和十八年頃からは、学生は戦場に行ってしまって、講義はもう出来んようになりましたね。カラッポです。だから学校はもうないような状態になりましてね。

教師も何人ぐらいでしたかね。ごくわずかになりました。文学部、法学部、神学部、そこの教授の若干は研究所というものに入ります。同志社大学研究所というのが出来まして。研究所長は田村徳治先生。この方は戦争礼讃なんです。東亜共栄圏思想ですね。田村先生の言葉を使えば大同社会ですね。それを作らなきゃならんという思想ですね。それを作るための戦争なんだということで戦争礼讃なんです。戦争に勝つ論文を書いてくれということをよく我々におっしゃった。私は、戦争は論文で勝てませんよ、これは強い方が勝つんですよ、と言ってですね、先生の言うことを聞きませんでした。他の研究をやってました。福沢諭吉とか加藤弘之とか日本の思想史ですね。私は思想史が好きですからそれを勉強してました。で、戦争には全然協力はしておりません。この町内もね、戦争協力体制が出来ておりましたけど、それにも出ておりません。　私は戦争大嫌いなんです。大嫌いだけれども、国家である以上戦争というものは必然の現象だと思っておりましたね。私がバカでした。（折田泰宏）

特集

『国定教科書』の歴史

文部省が著作権を持ついわゆる『国定教科書』制度は一九〇三（明治三十六）年に始まり、一九四九年まで四十二年間もの長い間続いた。教育史では戦前の国定教科書制度を五期に区分している。

◎国定第一期《一九〇三（明治三十六）年》

修身、日本歴史、地理の教科書から始められ、修身には「孝行と忠義」、歴史は「天照大神」から書き始められている。

◎国定二期《一九〇九（明治四十二）年》

愛国教材として「広瀬中佐」「水兵の母」が強調。南北朝正閏論が問題となり「南北朝」は「吉野の朝廷」と書き改め足利尊氏らは賊軍とされる。

◎国定三期《一九一七（大正六）年》

読本では軍国主義教材「大日本」が現われ、また歴史は国史と改める。

◎国定四期《一九三三（昭和八）年》

教科書は国語読本に〝サイタサイタサクラガサイタ〟のように文語体から口語体に変わり、色刷となる。

◎国定五期《一九四一（昭和十六）年》

一九四一年、「国民学校令」が公布、施行され従来の小学校は国民学校と改称。〝教育ヲ全般ニ亘リテ皇国ノ道ニ帰一セシメ……〟とし、新たに国民科を設ける。

当時の国民学校初等科の教科は国民科＝修身・国語・国史・地理。理数科＝算数・理科。体錬科＝体操・武道。芸能科＝音楽・習字・図画・工作・裁縫（女子）となっている。

一九四一年、第一学年、二学年生に配布された国民学校教科書の『ヨミカタ・一』には、

〝アカイ　アカイ　アサヒ　アサヒ〟が登場。教師用教科書には「東亜日本の春の夜は明けて、東に真紅の太陽がのぼる。この壮美に感動した児童の叫び声である」と趣旨を説明している。

一九四三年に配布された第五、六学年用の「初等科国語五」には、

〝この国を神生みたまひ、この国を神しろしめし、この国を神まもります……〟という長い詩も出てくる。

また、〝日本ヨイ国、清イ国。世界ニ一ツの神ノ国……〟も出る。

第二次大戦を聖戦とするべく子供たちに、マインド・コントロールさせるための教科内容が基本となっている。

一九四五年、「終戦ニ伴フ教科用図書取扱方ニ関スル件」が出され、教師の指示で全国の国防教材や戦意高揚教材などに墨をぬる作業が生徒により行われた。

（一居時江）

※参考文献　山中恒著『ボクら少国民』シリーズ

あの頃の子は今の子より元気だった

塩貝晋さん（七十六歳）に聞く

昭和十六年からは三年間、北野にある翔鸞国民学校で教え、十九年に北白川国民学校へ移りました。翔鸞には当時乗り物もない時代でしたから、底のはがれそうな靴で一時間ほどの道のりを毎日歩いたものです。北白川では途中、昭和二十年の六月から十月まで淡路島へ出兵しました。とにかく海軍、陸軍の特攻部隊がありましたからB51、B29が低空を飛び、農道を歩いていても打ってくるので常に恐怖だったですね。

北白川は町から外れていたため疎開もなく授業は毎日ありました。高学年を受け持っていましたが天皇を中心とした国史や地理、修身が重要課目。文部省直轄の国定教科書ですから、戦争の話や詩がどんどん入ってきましたね。その頃は転校しても新しい教科書を買うことができなかった子もいて、ある意味では便利なところもありましたが。

昭和十九年の四月に学童給食が始まり、コッペパン二個と具の少ない味噌汁が配給されました。成長盛りですからこれだけではとても足りません。山が近くでしたから食べ物を求めて勉強をやめて山に入ったものです。冬は石炭がわりにたき木を拾いに行きました。当時の子供達を見ていると貧富の差がかなりありましたね。ズック靴も配給でしたから戦争の終わり頃には裸足の子が多くなった。私も裸足です。とにかくパンだけでは足らなくてよく倒れる子もいました。何しろ運動場で行う朝令は今と違って直立不動。〝気をつけ〟〝前へ進め〟それはそれは厳しいものでしたから。

大変な時代でしたが子供達は皆元気でした。体操の時間には丈夫になるように上半身はだかでかけ足をさせたり、身体をこすらせたり。少々のけがをしても今のように親から文句をいってくることもなかったですしね。

父親が戦死したり、生徒の戦死もありましたが当時のお母さん方は皆の前でほとんど涙を見せなかった。最も陰では泣いておられたんでしょうけど。遺骨が帰ってくると子供達と一緒に迎えに行き、並んで家まで歩きました。当時の私の教え子も二人戦死しています。

一クラスの人数は経費の事情もあり多い時で六十二名、常時五十名近い子がいました。加えて教案、学校全体と学年別の研究授業などがあり今よりも忙しかったですね。そうそうある時教室で〝この戦争は敗ける〟と思わず口

走ったら子供が〝先生そんな事いうと憲兵に引っぱられる〟といわれたこともありましたね。

当時はよく子供を殴った。今もクラス会に呼んでくれるんですが〝よく先生に殴られた〟といわれて頭の下げどうしです。これだけは申し訳なかったと今でも思いますね。

豊かな自然がいちばんの友達

上田まどこさん（五十九歳）に聞く

下鴨国民学校五、六年生の頃は、敗戦間近かで軍国主義の一番ひどい時代でした。当時の担任は男装をした女性教師で、生粋の軍国主義者。今でもくっきりと思い出せます。御真影に頭を下げるのは当り前。とにかく男の子も女の子もよく殴られました。私も誰かが物を盗んだ盗まないで身代わりになったため、丸めた本でしたたかに殴られたのを記憶しています。教育者でありながら正義感のないいじめが多く、特に頭の悪い子に対しては、からかっていじめる陰湿ないじめも平気でした。四年生までは授業はあったのですが、五、六年生になると文部省も先生も自分達が生きるか死ぬかに一所懸命で生徒はほったらかしにされていましたね。先生によっても違うんでしょうが、私のクラスでは教育は放棄されていましたから算数の計算などにしても基礎がすっぽり抜けていて、これは後々まで尾を引きましたね。毎年一回当時の人達とクラス会を開くんですが、互いに出るのが〝今の子供達のように勉強ができていたら〟。悔しい思いがありますね。

コッペパンと味気のない味噌汁だけでしたから、誰もがひもじい思いをして暮らしていました。よく妹を置いて母と一緒にお手伝いさんの故郷をしたって買い出しにでかけたものです。当時はマッチ一箱でもお芋に代えてくれる時代でした。その頃はどの母親も子供を育てるのに必死でしたね。家のことで思い出すのは当時は虱や蚤が多くて、夜いざ寝ようとすると白い敷布の上をゴマのような蚤が飛ぶんです。母子でよくつぶしたものでした。

今と違ってほんとに自然が豊かでしたから、学校から帰ってくるとすぐ鴨川へ遊びにでかけたものです。カエル、ゲンゴロウ、ヒル、ドジョウ、ヘビなど種類も多くて多彩でした。自然はほんとに大切な友達でしたね。

祖母は、この戦争には一貫して反対していました。で、敗戦の時は〝敗けたんが敗けただけや〟という祖母のことばには私も素直に受けとめることができました。（一居時江）

特集

沈黙の十年・大本教弾圧とそれ以後

稲垣良代（亀岡市在住）

一九三五年（昭和十年）十二月八日未明、京都府亀岡、大本教本部天恩郷は、二三〇名の警察隊に包囲されていた。綾部にある総本部をはじめ、全国一〇九ヵ所の諸機関が、急襲され、出口王仁三郎は島根別院で、検挙。多くの信者が検束、留置され、難をまぬがれた信者たちも帰郷を命ぜられる。

大本教――京都府北部、綾部の貧しい寡婦出口直（なお）が一八九二年（明治二十五年）開いた民衆宗教――末娘の澄（すみ）と結婚した王仁三郎らの力を得て、次第に大きく発展していく。しかし、一九二一年（大正十年）に弾圧を受け、再び、一九三五年（昭和十年）大弾圧に見舞われる。近代の宗教教団のなかで、もっとも激しく国家から攻撃された教団として世に知られるところである。

大本教は一九四五年十二月、「愛善苑」として再び出発した。しかし、王仁三郎、そして二代教主・澄の死後の教団は原水禁運動をめぐって、日米安保をめぐり内部での抗争が続いていたが、三代教主・直日により「大本」に改名。やがて、改革派千八百人の教団追放、第三次大本事件、現在、裁判で係争中であるが、改革派拠点となっているのが「愛善苑」（「株式会社いづとみづ」）である。

「愛善苑」はかつて弾圧から敗戦までの十年を出口一族が暮らした中矢田農園にある。保釈、出所後、王仁三郎が住んだ熊野館をはじめ、かつての建物が今も当時の面影そのままに残る。

戦時中の「大本」について、お尋ねしようと愛善苑へ行くところだった。建物の手前の畑の横に、偶然、出口和明さんが、二枚重ねに着物をぞろりと着てぼんやりと佇んでおられる。大本の前半史を記した「大地の母」の著者であり、王仁三郎の孫、現在の熊野館の主である。和明さんにお会いする予定はまったくなかったのに、不思議にも目の前にいる人にこれは、おたずねせよとの計らいかしらと、突然に私は話を切り出した。和明さんの畑のいちじくが青い実をつけている。その木の下に置いてある腰掛けをすすめられて、「弾圧下の一般の信者さんたちの信仰はどのようなものだったのですか？」とお

たずねする。

「『地上から大本教を抹殺する。』という国家の強引な意志のもとに行われた弾圧なのだから、公然と「大本」の信者を名乗る者はひとりもいなくなった」。「『かくれ大本』として自らの内に信仰を強く持ち続ける人たちは各地で、それぞれ排斥、迫害のえもいわれぬ苦難を味あわれたのには違いなかろうが、特に物語りとなるようなことは、ないのです」。話はやはり出口一族の物語りかと改めて和明さんに真向う。弾圧の時、五歳だった彼が、記憶するその後の十年こそが、秘された戦争の大本教史に重なる。

一九三五年十二月八日の大弾圧、翌年三月、二代教主澄の検挙と同時に大本教団の解散命令と教団全ての建造物の強制破却処分を発令。しかも破却費用を教団に負担させ、土地や財産は捨て値同然で売却させられた。膨大な書物類、祭具類、美術品を燃やす煙が一ヵ月以上も続いていたという。治安維持法違反、不敬罪で幹部の男たちは獄につながれ、女や子供たちは、竹やらいで囲まれた山すその長屋に軟禁される。特高の見張りがついていた。

実は、和明さんに出遇うよりはやく、こちらも王仁三郎の孫にあたる雅子さんに彼女のおうちの前で会った。一緒について来てくれていた雅子さんがその当時の母たちのことを面白そうに話して下さる。「ごはんを作ることも、いろりの炭をおこすことも知らない女たちだったから、しまいに警官が見かねて、手伝ってくれていたらしいのよ」。

教団の宗教活動は停止されていたが、裁判斗争は続けられた。太平洋戦争のさなかの、一九四二年七月審判が下りる。全員、治安維持法無罪。王仁三郎以下八人の不敬罪のみ残ったが、保釈され出所。戦時下、中矢田農園で百姓仕事に励む。王仁三郎は敗戦前に三千個超える、「耀盌（ようわん）」を焼き、しのんで彼を訪ねる人たちに手渡す。「十年間教団の宗教活動はなかったのですか」との問いに「それはなかった」ときっぱり。王仁三郎のもとを訪れる人たちも真夜中にこっそり、が関の山だった。それでも、王仁三郎は、「この戦争は負ける」「鉄砲は下に向けて撃ちなさい」果ては「我敵大勝利」とまで書き、渡す。不屈の意志をユーモアたっぷり見せて、来る人を励まし続けた。

仏教界もキリスト教界も、なだれをうって侵略戦争への翼賛、協力へと推し進んだ時、大本教は弾圧され、獄につながれ、特高に見張られ、自らの教団を解体させられて、戦争には一切加担しなかった。「大本教は世界をうつす鑑（かがみ）」との直の筆先。信者たちには大本教の破壊は、日本の、世界の破壊にみえた。彼らが、耐え続けた戦争の十年が、和明さんの目に、「王仁の子」といじめられた姿と共にやきついている。

戦時下の祇園祭とその復活

京の夏を彩る風物詩と言えば、「祇園祭」と「五山の送り火」。その起源は共に民衆の宗教的行事にある。

平安時代、当時の人々は疫病の流行をこの世に怨みを遺して不慮の死を遂げた故人の霊の祟りによるものと考え、これを慰和し、遠く異郷へ遷却しようとした。祇園社（八坂神社の前身で祭神は須佐之男命）を信仰し、病魔退散を祈願したという。この祇園社御霊会（ごりょうえ）は再三、中絶、再興を経て今日の祇園祭、世界の祇園祭となった。

この千年の伝統をもつ祇園祭も、燈火管制、国家総動員法の公布、食糧配給の切符制などの非常時、祭の存続が危ぶまれた。京都にも空襲のうわさが広まり、山鉾町でも疎開する人が増えたからである。

また、高さ二十五メートルの鉾の先にある長刀や月の金物が攻撃の目標になるのではないかと心配された。

一九四二（昭和十七）年、鉾建ては七月十四日に繰延べられ、宵山の提灯の点燈は中止された。この年四条通りを巡行した鶏鉾には、「祈皇軍武運長久」の垂幕が下がり、当時の人々の戦争への想いが伝えられている。

一九四三（昭和十八）年より鉾建ても巡行も中止されたが、七月十日の神輿洗いだけは一九四四（昭和十九）年まで行われたようである。

敗戦直前の一九四五（昭和二十）年には、神前での祭典のみ厳かに斎行され、清々講社員、氏子総代らが集まって英米撃滅の祈願をし、氏子は心のお祭に必勝を期したという。十六日、表千家宗匠奉仕の献茶祭、前日祭。十七日、高原宮司以下奉仕で前の祇園会の祭典。二十四日、後の祇園会祭典。二十五日、茂山忠三郎社中の狂言の奉納などはあったが、四条御旅町の御旅所は開かれなかった。神輿洗いも宵山も山鉾巡行もない淋しいものだった。

一九四六（昭和二十一）年の祇園祭は八坂神社で祇園囃子を奉納しただけで終わった。長刀鉾と月鉾の二基が建てられ、戦後の荒廃の中から祭がよみがえったのは、翌一九四七（昭和二十二）年だった。この時、稚児を乗せた長刀鉾のみ四条寺町まで往復巡行した。インフレと食糧難がひどく、補助金も一部、現物給付でじゃがいもやお米をあとで換金し、経費のやりくりに苦労したらしい。

大文字は人文字だった

わが国では、古来、亡き人の魂はこの世に災いをもたらすものとして畏怖すべき存在であり、お盆はそのような精霊を供養し、山村では里山へ、海辺では海へ（精霊流し）、死者の霊を送るのが慣しだった。

今も、各地に残る送り火（精霊送りとしての民衆信仰）は、祟らないよう、鎮めた精霊を「あの世」へ追いたてる大切な行事である。

毎年八月十六日、保存会会長さんによる「一文字、ええかー」「字頭、ええかー」「北の流れ、ええかー」「南の流れ、ええかー」の掛け声の合図と同時に、一斉に点火される大文字。戦時中はどうだったのだろう。当時、戦争に散った沢山の兵士たちは初盆を迎えていた。

開戦二年目の一九四二（昭和十七）年、例年通り、八月十六日の夜、五山の送り火は点火された。

しかし、翌年、戦時色がだんだん濃くなると同時に、燈火管制もあって、中止となった。そのかわり、二〇〇〇人の地元小学生や町内会の男女が動員され、白いシャツ姿で、十六日早朝、火床の位置に並び、ラジオ体操をして白い大文字を描いたのである。

「雪大文字」ではない。人文字による、そして動員による白い大文字だった。

この人文字を「忠魂に捧ぐ浄白の大文字」の見出しで当時の新聞（大阪毎日新聞　一九四三年八月十七日）は報道している。

この後、送り火は一九四四（昭和十九）年、一九四五（昭和二十）年、中止されたが、一九四六（昭和二十一）年、地元保存会の熱意で復活した。この時、京都新聞（一九四六年八月十七日）は川田順の歌を載せている。

いくさ果てて先づ大文字の火をともす
　ふるき都に新しさなし
大文字は今宵ともれり舊くして
　滅びざるものありと思はむ

なお、一九四七（昭和二十二）年には「鳥居」を除く四山、一九四八（昭和二十三）年から五山が復活した。

‡　‡　‡

このほか京の代表的伝統行事である時代祭は一九五〇（昭和二十五）年に、葵祭は一九五三（昭和二十八）年に、戦時中の中絶から復活した。

（塚崎美和子）

立野家に今も残っている防空壕

一九四五（S20）年になって日本各都市への小規模爆撃が頻繁に行われるようになった。

この京都でも一月十六日の夜、東山区渋谷通東大路東入ル下馬町に爆弾が投下され、死者四十一名、負傷者五十名、家屋全壊二十九戸、半壊ないし一部損壊二百八十七戸の被害が出た。これが最初の京都市への空襲である。

三月十九日には右京区春日通高辻上ルが爆撃され、一名負傷、四月十六日には右京区太秦巽町付近の三菱重工の爆撃で工員二名が死亡、動員学徒を含む四十八名が負傷、四月二十二日には上京区紫竹付近の爆撃で四名負傷、五月十一日には御所付近（十一名負傷）と中京区西ノ京付近（一名負傷）が機関砲による攻撃を受けた。さらに、六月二十六日の朝、上京区出水付近の西陣が爆撃され、死者五十名、負傷六十六名、家屋全壊七十一戸、半壊ないし一部損壊二百二十一戸の被害があり、最大の被害となった。この京都市では九十名の死亡者が出たことになる。

しかし、これらの被害は公式の記録は少なく不正確である。京都宗教者平和協議会は一九七二（S47）年に京都空襲の事実を発表し、それまで京都には空襲はなかったと思っていた人々を驚かせた。その後、宗平協は「京都空襲を記録する会」を組織し、同会は全府下を調査して、その成果を一九七四（S49）年『かくされていた空襲』（汐文社刊）で発表している。その時に収集された資料は府立総合資料館に保管されている。

＊

これらの資料で空襲の状況を見てみよう。

下馬町に落とされた爆弾は、モロトフのパンくずと呼ばれる小爆弾がつまった爆弾であったらしい。警戒警報も空襲警報も出ない突然の爆撃で、日本軍の演習と思っていた人が多い。下馬町は寺、住宅や学校があるだけで軍事施設はない。この爆撃で多くの家とともに京都女専（現在の京女）の第三小松寮がペチャンコになった。報道管制は厳しく翌日の新聞には、「京都市内の一部に爆弾を投下、家屋等の倒壊をみたが被害は軽微にして市民の士気は極めて旺盛、何の動揺もなく職場に挺身している」と報道されただけで場所や被害については報道されなかった。

四月の太秦の三菱重工には二百五十キロ爆弾十個が投

下された。お昼休みでほとんどの工員は食堂にいて助かった。しかし、工場でお弁当を広げていた工員二人が犠牲になった。

最大の被害になった西陣は、六～十の編隊のうちの一機が高射砲の被害を受けて機重を減らすために落としたものと言われる。午前九時三十分ごろ五十あるいは二百五十キロ爆弾が七個落とされ、二個は不発であった。街頭の電柱や屋根の上に人間の肉塊や手足が飛散し、銀杏の木に死骸がへばりつくと言う悲惨な状況で、出水小学校が臨時の野戦病院になった。空襲警報で防空壕に避難したが、近くに爆弾を落とされ即死した人、防空壕に生き埋めになった人もおり、防空壕は余り効果はなかった。

防空壕と言っても家の床下に穴を掘って作るだけ。下京区の立野留志子さん（七十四歳）は「防空壕に一旦入ってうっかり空襲を受けたら、かえって丸焼けになって死ぬという噂が飛びましたね。逃げる方が勝ち」と言う。しかし、翌日の新聞は「三度び京都盲爆、罹災者の救護はすみやかに進み、現場に復仇の士気揚る」とし、防空壕の効果が宣伝されるだけで被害の状況は秘密にされた。

＊

確かに京都は他の大都市とは違って大空襲を受けていない。一九四五（S20）年三月十日の東京大空襲では百五十機のB29が来飛し、四割に当たる十八万戸が焼失、全国二百八都市中でも九十八都市が半ば壊滅する空襲被害を受けている。しかし、京都が爆撃目標から外されていたかどうかについては確たる証拠はない。原爆については投下の目標に入っていたということが最近の調査で判明している。京都の人は大阪が大規模な空襲を受けて燃えているのを遠く眺めながら、上空にはB29の大編隊が通過する度に、次は京都ではと不安な毎日を過ごしていた。

先の立野さんの記憶によると、町内会で墜落した米軍飛行機の飛行士に石を投げ付ける訓練をしていたと言う。

当時下京区に住んでいたS氏は当時四歳、「私の近所では爆撃はなかったですが、B29の爆音と機影は良く覚えています。太陽でキラキラ光っていました。B29が来る前に、レーダー攪乱のためにアルミ箔と油紙をサンドイッチにしたようなものが撒かれるんですね。それがキラキラとして奇麗でしたね。それを拾ってよく遊びました。京都は爆撃しないと言うようなビラを撒いていましたが、大人は人を安心させておいて爆撃するのではないかと疑っていましたね。終戦間際だったと思いますが、B29が木津川に墜落して、地域の責任者をしていた父が自転車で駆けつけたことがあります。リンチで飛行士を殺してしまったと聞いています。家にしばらく墜落したB29の備品が置いてありました。戦後、米軍が調査に来たらしいですが、関係者の口が固くて真相は分からなかったようです」と当時の思い出を語る。（折田泰宏）

戦時報道規制の中での暮らしは つぐづぐこわいもの

祖母の父親は四条で本屋・菊屋を営みながら土佐藩の藩士・坂本龍馬、中岡慎太郎などに私塾していた峯吉さん、一方祖母の母親は新選組も通った島原の角屋で刀を預かる仲居さんだった。日中、太平洋戦争時、舞妓だった吉田さんに、当時の祇園を語っていただいた。

吉田良子さん（69歳）に聞く

祖母が「今日は学校へ行ったらあかん。東京で兵隊さんがえらい事起こしはった」と。この戦争でまず最初に思い出すのはこの二・二六事件ですね。その日は京都もえらい雪降りでした。

家がお茶屋なもので、舞妓になるため小学校を四年で出て歌舞練場の裏にある女紅場に二年通いました。一クラス五十人で午前中は読み書き算盤、それに歴代の天皇を覚えさせられ、午後は舞やお茶の稽古ごと。六歳の六月六日から稽古ごとを始めると上手になるといわれて、私も六歳から舞を始めたんですよ。それは厳しいものでした。

舞妓になったんが日中戦争の頃ですから、荒木大将や東条さんの後に総理になった小磯大将、それに軍曹、伍長、少尉など軍人さんに呼ばれることも多かったですね。特に軍曹や伍長あたりはエラぶっていましたね。近藤文麿さん、カネボウ、資生堂、大日本製薬の社長さんなどもよく見えました。

学生さんはあの頃はよう遊んではりましたね。皆、兵隊に行ったら生きて帰れるとは限りませんから、言わず語らず楽しんでおこうということがあったんでしょうね。私も橋本関雪さんや九鬼周造さん、ドイツ文学の成瀬先生とえらい先生が多かったんで、仕事が終わってから若い学生さんと遊ぶのは息抜きができてほんと楽しかったです。十五、六年頃にはなくなってしまいましたが、東山の蹴上げにあったダンスホールにはよく行ったものです。そうそう、あの頃菊地寛さんも着物と袴をゾロっと着流してよく来てはりましたね。九鬼さんはよく御贔屓にしてくれて、いつも一力の仲居さんから「はよ来てくれへんと、あの先生難しいしあんまり喋らへんから」と呼び出しがかかりました。私達が行くと紅茶とケーキ。

夏ですとシャーベット、冬はプリンを御馳走してくれて。戦時中で、しかも舞妓だけでお店に入ってお茶や食事をするのは御法度でしたからうれしかったですね。

太平洋戦争が始まった日は朝から軍歌ばかり流れておかしいなと思っていたんです。でも私らのんびりと南座へお芝居を見に行っていて、〝今度はアメリカとやて〟と聞いて驚いたんです。というのもこの戦争は〝やるか、いややらへん、いや、やる、アメリカとしたら敗ける〟など外では話せないことをよく耳にしていましたからね。

戦争がひどくなってくると〝振り袖を着ている時代じゃない〟と国防婦人会の人に袖を切られたり、モンペをはかな町も歩けませんでした。物もなくなり、サッカリンが砂糖の代用品でした。祇園小唄を作られたなが田さんのお嬢さんと友達になって、ある日東京へ伺ったんです。お母さんが本当のおしるこを拵えてくれて。今だに忘れられない思い出です。

当時、ダイヤや金を持っていたら全部放出せよと。しないと非国民といわれましたし。今まで戦争に敗けたことがなかったので、皆どうなるか解らなかったんですね。結局、放出したダイヤや金は闇に消えて、今もって不思議な思いをしています。

当時の花見小路は一力さんから南をいったんです。戦争前には芸妓さんも六百人ほど、舞妓さんも百人ほどいましたから、子供の頃夕涼みをしながらそぞろ歩きの芸妓さんたちを眺めるのはそれは楽しいものでした。四条通りに面して北側には十二段屋さんやお茶屋さんもようけありました。気の毒に強制立ち退きさせられてしまって。それで花見小路が北に延びたんです。

十九年頃からはお茶屋さんも休業状態で、私も四年前に亡くなった主人にぜひ嫁に来て欲しいといわれ、母親の反対を押しきって結婚し、芦屋に住みました。

B29がどんどん飛んできて空襲がひどいのに、ある日町内会の人がヒマワリのタネを植えるようにと持ってくるんですよ。何でもヒマワリのタネから油を採って飛行機の燃料にするとかで。つくづくもうこれではアカンなと思いました。結局、家も何もかもやけて二十一年にまたここへ戻ってきましたが、この後二年ほどは本当に死にものぐるいの生活でしたね。

（一居時江）

ビル・マンション建築 管理
株式会社 ビケン
代表取締役 石田 勝久
専務取締役 一級建築士 八木 保治
本社：〒604 京都市中京区千本通御池下ル
（JR二条駅前ビケンビル内）
TEL (075)841-1223㈹
FAX (075)821-2317

特集　戦時期の京都

その時、自治組織も完全に崩壊した

▼大政翼賛体制、政党の解散

京都は、一九二八（S3）年二月の普選施行の最初の総選挙で、政府の無産政党弾圧下でありながら、労農党の水谷長三郎、山本宣治を議会に送った。

しかし同年の三・一五事件、労農党の解散命令、翌年三月の山本宣治の暗殺など無産政党の弾圧が続き、その二年後の柳条溝事件から、政治・社会状況が一変し、国民も排外主義の風潮に毒されることとなる。

無産政党はこの後分裂、統合、国家社会主義への転向をしながら次第に衰微していく。

一九四〇（S15）年七月、第二次近衛内閣が成立し、新体制運動が始まり、同年十月大政翼賛会が成立し、全政党が解散した。

日本は、一九四一（S16）年十二月八日にはついに英米に対して宣戦布告をすることになったが、政府は、これを機会に、議会を議員の粛正を図ることを意図して、延期されていた総選挙を実施した。このために内務省は警察機構を動員して立候補者適格リスト、現職代議士の資格審査リストを作成し、候補者をチェックし、選挙法の建前上、政府が直接候補者を推薦することができないので、御用団体としての翼賛政治体制協議会を設立して選挙干渉を図った。しかし、この京都では五名の当選者の中で非推薦の水谷長三郎、弁護士の田中伊三次が当選し、革新京都ぶりを示した。水谷長三郎の四条西洞院の選挙事務所では、警察が近くに借家を借り、望遠鏡で出入りする人物を監視し、何かと理由をつけて職務質問をしたり、運動員を留置するなどの嫌がらせをしていたという。

市会でも、一九四二（S17）年六月に市会議員選挙が実施されたが、これに先立つ五月、当局の介入により京都市翼賛市会協議会が結成され、推薦候補者を決定した。この選挙でも当選者六十四名のうち、非推薦組十四人が当選した。

しかし、六月十八日に開かれた市会議員総会では、京都市翼賛市政会規約が決定され、「全員一致翼賛市会の進展に挺身する」と決議され、一九四五（S45）年八月二十九日の翼賛市会の解散まで市議会の会派は消滅してしまったのである。

▼町内会組織も行政機関と翼賛体制に組み込まれた

一九四〇（S15）年七月の第二次近衛内閣の大政翼賛会については、近衛自身は、国民の自発性を喚起するこ

1940(昭和15)年 大政翼賛会・京都支部発会
1941(昭和16)年 京都市全町内会結成式
1945(昭和20)年 4月の統計では、市内 3634町内 24452隣組

とを狙っていたが、内務省はこれをおそれ、町内会、部落会を上意下達の行政補助機関とすることを考えていた。結局は、近衛の意向とは別に町内会は完全に上意下達の機関として機能することになる。

この翼賛会は同年十一月には京都府支部が、十二月には京都市支部が作られ、知事、市長がそれぞれ支部長となった。同時に市町村の下部組織として町内会や部落会を整備して国策の遂行に協力させることになった。

それまで、この京都では、町内には公同組合と呼ばれる自治組織が存在していたが、十一月二十三日、当時の加賀谷市長は「京都市町内会設置基準」、「京都市町内会規約準則」、「京都市学区町内会連合会京都準則」を作成し、町内会、町内会連合会、隣組の組織を整備し、それまでの公同組合は解散し、四十四年の歴史を終わった。

町内会は、配給事務や、健民運動、納税事務など行政事務に対する協力をすることとなった。配給は砂糖、マッチから始まることになる。また、これとは別に防空のための防護団組織が地域に組織されていた。

一九四二（S17）年に東条内閣が登場すると、大政翼賛会を町内会、部落会、隣組の指導組織として位置づけることとなり、町内会は大政翼賛会の下部組織と地方制度の末端組織の両面を持つことになった。

敗色濃くなり、本土決戦体制が組まれるようになると、政府は、町内会を大政翼賛会や行政の下部組織として位置づけるだけでは不適当であると考え、国民義勇隊を組織することとなった。

一九四五（S20）年五月二十四日、京都でも地域、職域、学校ごとに組織され、地域では京都市国民義勇隊が編成され、当時の篠原市長が隊長となり、区ごとに大隊、中隊、小隊、班を編成、区長が大隊長、町連合会長が中隊長、町内会長が小隊長、隣組長が班長という具合であった。これに従い大政翼賛会は解散され、町内会は義勇隊と不可分の関係となった。

義勇隊は、本土防衛活動のための工事作業、軍事作戦行動の補助、警防活動などを任務とし、地域でタケヤリ訓練などを実施した。馬鹿馬鹿しいと思いながら付き合っていたという当時の思い出を持つ人が多い。

この体制は、一九四五（S20）年八月二十九日の国民義勇隊解散まで続いたのである。

（折田泰宏）

宇治茶専門店
〈星〉竹村玉翠園本舗
市内配達
地方発送承ります
〒六〇六 京都市左京区熊野神社東入
電話(〇七五)七七一—一三三九

特集

戦争中の精神病院

塚崎直樹
（京都博愛会病院精神科医師）

つい最近まで、NHKの午後の連続テレビドラマと言えば、決まって第二次世界大戦中の体験がテーマの一つになっていた。それほど、日本人の多くにとっては、戦争の体験が忘れられないものだったのだろう。しかし、その体験にはいくつかの欠落とも、死角ともいうべきものがあって、その一つは、障害者にとって戦争がどんなものであったかという視点である。ここでは戦時下の精神病院の状況を振り返って、精神障害者にとって戦争がどういうものであったかを、考えてみたい。

戦前の日本には昭和十六年を最大として約四九〇〇の病院があり、その内一六七が精神病院だった。ベットの数で見ると、二〇万床の総ベット数のうち、二四〇〇〇が精神科であった。これは、今日の病院総ベット数のおよそ四分の一が精神科のベットであることに比べれば、はるかに少ないものである。これは、精神障害者の収容が進んでいなかったと同時に、精神障害者が私宅監置という座敷牢の形で、多数収容監置されていたことを物語っている。

戦争中の国内の体験としてまず語られるのは食糧難であるが、精神病院もその例外ではなかった。敗戦後のことだが、法律を破ることができないとして配給の食料だけで生活していた裁判所の判事が、栄養失調のために死亡したということは比較的知られている。つまり、時代を生き延びた日本全国のすべての人が、法律を犯して闇米を食べて飢えをしのいでいたのである。しかし、鉄格子で囲まれた精神病院に入院している患者たちは、闇米をたべようにも外出の自由がなく、与えられた配給量で死を待つしかなかった。患者を入院させた家族のほとんども、社会の混乱期のため、患者の食料確保にまで手が回らなかったのが実状である。そのため、精神病院の内部では、多数の精神障害者が栄養失調という名の餓死を遂げていったのである。

当時の統計資料が比較的残っている東京都立松沢病院では、昭和二十年の患者死亡率は入院患者の四十％に達している。六七〇床のベット数に対して年間四八〇名の死亡者である。当時の松沢病院に入院していたことのある患者から直接聞いた話では、バタバタと仲間が死んで

いき、次は誰が死ぬのかがわかったくらいひどいものだったという。松沢病院の昭和十八年から二十二年頃までの死亡者を計算すると、総ベット数のほぼ倍ほどの患者が餓死していた。これを、日本の総ベット数にあてはめると、約三〜五万人ぐらいの精神障害者が精神病院で餓死したと推定できる。

京都の精神病院の実状も似たようなものだった。当時の京都市内には、岩倉病院（三〇〇床）、川越病院（一二〇床）、三聖病院（二一〇床）、京大病院（八〇床）、京都府立医科大花園分院などの精神科病床があった。その他に、保養所と称する精神障害者の収容施設が岩倉地区を中心に十数ヵ所存在していた。これら保養所は全部で二〇〇人ぐらいの精神障害者を収容していた。全部で七五〇人ぐらいの障害者が収容されていたことになる。これに単純に松沢病院の数字にあてはめると、京都では一二〇〇〜一五〇〇人の精神障害者が餓死したということになる。

では、現場ではどうだったのだろうか。まず、配給量では生きられないのだから、病院のあらゆる敷地が畑にされた。そこを耕したのだが、働き手のほとんどは患者だった。当然職員も一緒に働いていたが、職員も自分が生きるためには自分の食料を作っていたから、患者の分を作ってやる所まではいかない。せいぜいが監督程度である。それにめぼしい職員はほとんどが兵隊にとられるか、軍需工場に行って、精神病院に残る人はごく少なかった。それで働く患者も、働かない患者も食料配給量が同じでは、だれも働かない。そのため畑仕事をする患者には、働かない患者の分をけずって上乗せすることになった。そのため、働かない患者の食料は、配給量よりもさらに減らされてしまった。当然そういう人達は生きていられなかっただろう。ところが、実状は生き残った人は、それなりに働いて割り増し分をもらった人と、まったく寝たきりとなって、ベットから動かなかった人であるらしい。意味もなくウロウロした人はほとんど亡くなってしまったという。昨日まで働いていた人が、「今日は少し疲れた」と言って布団から起きてこない。次の日の朝には布団の中で死んでいる。さっきまで、うろうろと歩いていた人が、パタンと病室の敷居につまずいて転ぶ。なかなか起きないので行ってみると、死んでいる。そういう状態であったので、あまり悲惨という感じはしなかったという。

働かないで食料を増やす方法は、他の患者の食料を取って食べてしまうことである。食物をちょっと手元に置いておくと、隙を見て取ってしまう等は普通のことで、食事中、隣の患者のお皿や茶わんをひっくりかえして、床にこぼれたところをパッと手でつかんで口に入れることが頻発した。すこしぼんやりした患者などは、ほとんど他の患者に取られてしまった。もちろんそういう患者は、

しばらくすると亡くなってしまった。まったくの弱肉強食である。

不思議なことに死亡率は男性に高く、松沢病院でも昭和二十年の男子の死亡率が五〇％なのに比べ、女性は三〇％であった。特に経産婦の死亡率は更に低かったという。江戸時代の飢饉の時でも、東北の村などで女性だけになってしまった所もあるというが、同じ現象なのだろう。

食料以外にもあらゆるものが不足していた。衣類も不足して、冬でも少ない衣類ですごせるように、夏から薄着の練習をして、夏にはほとんど裸ですごすことを指導した病院もあった。みんな痩せていて、まるで骸骨が歩いているようだったという。死亡者が出ると衣類は取り合いで、亡くなった次の日には、裸にされてしまっていた。もちろん、薬品、医療機器、医療材料も不足して、病院としての最低限のことさえできていなかった。松沢病院などでは、カルテもなければ、インクもないという状態で、入退院の期日以外には記録すら十分に残らなかったそうである。

戦争という事態になると、もっとも弱い存在に負担がかかる。精神病院が食料不足だった一方で、陸軍や海軍の病院には食料不足はなかったという。餓死した患者は多数いるけれど、餓死した医者や職員はいなかった。これらはやはり無視することのできない事実である。

日本以外でも、戦争中の精神病院の実状は同じようなことだった。しかし、イギリスでは空襲で破壊された病院から逃げだした患者が、結構自分たちの工夫で生き延びたことから、社会復帰に対する考え方が変化したといわれる。またフランスでは、社会から隔離された精神病障害者は社会変動に弱いということから、戦後になって精神病院の開放化がはかられた。ところが、日本ではなかなかそうした変化は生まれなかった。同じ経験をしても、そこから教訓とされることは違うのである。戦争中の精神病院はひどかった。しかし、それを本当に過去のことと言えるのだろうか。

（さらに興味のある方は、拙著「声なき虐殺」ＢＯＣ出版部、一九八三年を参照されたい）

立命館大学
国際平和ミュージアム
Kyoto Museum for World Peace, Ritsumeikan University

「十五年戦争の実態」「第二次世界大戦と戦争責任」「現代における戦争と平和」をテーマに、世界平和の創出を願って1992年に設立された。是非、一度、訪れて、戦争について、現代の平和について考えてほしい。

■開館時間－9:30～16:30（入館は16:00まで）
■休館日――月曜日（月曜祝日の場合は翌日）
祝祭日の翌日
年末年始（12月28日～1月6日）
夏期休暇中の大学が定める休館日。ただし、変更または別に定めることがあります。
■入館料――無料

〒603 京都市北区等持院北町56-1
TEL. 075－465－8151

あぴーる

自衛官人権ホットラインは、昨年9月1日に開設されました。PKO協力法の成立によって自衛隊派遣がタイムテーブルに載った6月、鶴見俊輔、中村尚司、高橋幸子各氏らのよびかけで準備がはじめられたものです。京都は第一次派遣部隊の中軸をなす大久保基地の地元であり、緊急の必要性もありました。

海外への出動は、自衛官個々人にとって、賛否いずれの意見であるにせよ、入隊時の契約内容にはなかったものです。国の政策と上司の命令のもとで悩み、揺れ動いているであろう自衛官の心に向き合い、人権をともに考えようというのが、ホットラインの趣旨です。

それは、違憲であり容認しがたい自衛隊という視点をこえて、自衛官ひとりひとりを、私たちの社会にともに生きている市民であり、隣人として、見ることを前提とします。そのように政治認識に規定されるのではない人間観を持つことの大事さは、いま強調されてよいと思います。

国家や軍の論理が「殺すこと」「殺されること」を強いてくる時、私たちは人間がたがいに生きてあるための基本的権利——個の人権を改めて確認する必要があります。具体的根拠は、日本国憲法にその背骨として刻まれています。

“政治をうがつに政治をもってせず”。政治主義的運動の意義は言うまでもありませんが、それをぬけ出ることによって、日本の社会風土のなかに個の原理に立とうとする小さな清水のわき出る可能性が生まれはしないか。

自衛官人権ホットラインは、長い歳月を見越したぐうたらな文化運動と言えるでしょう。

公開例会は毎月第2土曜の午後、参加自由です。問いあわせは事務局まで。

自衛官人権ホットライン
☎075-761-3174(日曜を除く毎日午後6時から8時)
《事務局連絡先》宇治市木幡熊小路38-9 ユニ宇治川5-709
足立修行(☎0774-33-0851)

戦争を教えて下さい

ビデオドキュメント —— 現代の語り部による戦争の追体験 ——

●沖縄編

上映会：93 8・7(土) 10:00～、1:00～、3:30～、6:00
洛陽教会地下ホールにて
当日一般 800円、会員 500円
問い合わせ 075-344-2371 (ドキュメンタリー・フィルム・ライブラリー)

守屋保彦さん

京都市北区に在住。
立命館大学・大学院・
国際関係研究科に在籍。
神奈川県小田原市出身。26歳。

京都からカンボジアの選挙監視員になって

選挙監視員になった動機

立命館大学を卒業して一担会社に就職しました。ところが勤めて二年半、予期せぬトラブルで突然何の予定もなく会社をやめましてね。去年の十月です。ぼくはそれまで五年とか十年計画でいちおう人生を設計してたんですが、たちまち計画倒れ。

失業して途方にくれて……だから動機は失業対策かな。新聞を見て応募しました。カンボジアやPKOの問題にもむろん関心はあったしね。会社をやめると度胸がついて、一般の仕事ではない体験もしてみたいと思って。大学院の入試勉強中でもあったんですが、先に選挙監視員の合格が決まりました。

少々の倍率はあったけれど、とにかく五十人余りが決定。でも出発直前まで辞退を迷う人がわりにいて、実際は四十一人になりました。二、三十代が多い、女性は五人です。

友だちは「エー、ホント!」とか「どうして行くの?」という反応。両親は反対で、親類も集まったりして「やめた方がいいのではないか」と言いましたが、ぼくの選択です。

よくボランティアと言われますが五月六日から六月十一日まで、その間のみの国家公務員という扱いで、何等級何号棒とか条件に応じて金額は各自ちがうはずですが、日本政府から月給が出ましたよ。ぼくの場合は五月分が手取り十一万円、六月が約八万かな、帰国後に振込まれました。ほかにボーナス少しと、現地の日当として八千円から二万円ぐらいまで任務先によって分かれますが、支給される予定です。アンタックからも行きが一五〇〇ドル、帰りは一一七九ドルが出ました。

タケオにむかって

四十一人は五月十二日、日航機でバンコックに着きました。連絡が悪くて待つ時間の方が長かったけど、そのあと長距離バスで三時間半、夜十一時ごろタイのパタヤという観光地のホテルに入ったんです。

パタヤには各国の監視員がみんな集合して千人ほど。翌日から三日間研修が行われました。それから配置の発表です。希望はきかれた覚えがないなぁ、どの国の誰が、どこの州のどの投票所に行くか、アンタックの決定は興味深いところでした。

そして五月十七日、日本人全員と

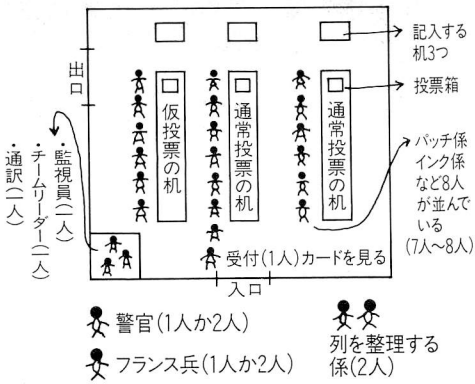
ほか三、四十人が軍事用の輸送機で約一時間、プノンペンに着いて三時間ほど待ち、次はヘリコプターでタケオに入りました。

暑さはちょうど日本の真夏ぐらいだったかな。危険度に応じてグリーン、イエロー、レッドと地区分けがあってね、イエローの『コーアンデット地区』に行くぼくたち五人は二十一日に現地入りしました。

どこもお寺とか学校が投票所で、一投票所に一監視員がつきます。ぼくがいたのは自衛隊の基地から車でほぼ二時間というお寺の投票所でした。

投票所の内面図

タケオ・コーアンデット地区



投票所のようす

コーアンデット地区五人の任務体制は三種類に分かれてるんです。

つまり五月二十三、二十四、二十五日で投票が終わり、その三日間を同一の監視員が赴く、これが二名。次はあと二日間、二十七、二十八日なども選挙が続いて合計五日間、一日ごとに担当の投票所が変わる人、これが一名。そしてぼくの場合は、最初の三日間は同じ所で、残り二日間は投票所が変わる、このシステムが二名でした。有権者数に合わせて各投票所の開閉期日もそれぞれなので、応用体制なんですね。

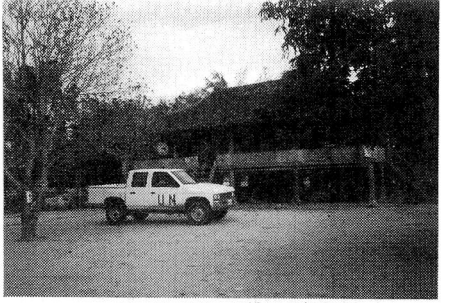
一日目は忙しかったですよ。早朝五時半ぐらいから二、三百人の人が来て。開始は八時なのにね。列を整理する係がいて……と言っても現地の係はのんびりブラブラしていて、ほとんど警官が整理してました。

きれいな服で着飾った人も多いし果物なんかを売りにくる人もいましたね。でも二日目の朝十時ごろからバッタリ人が来なくなって、スタッフの中には昼寝する人もいた。

投票所は上図のような配置です。

まず入口に現地スタッフの受付係がいて、ここでカードを見せます。写真入りの身分証明書ね。このカードに問題がないと、右側の二つの長机の、どちらかに進みます。そこには七、八人がチームになって並んでいて、たとえばカードの端に穴をあけるパンチ係がいます。あとでこの穴を数えて投票数と照合するんですが……。

面白いのはインク係。液に投票者の指をつけるんです。三十秒ほどで乾いて投票期間中は決して落ちず、ライトを当てると光ります。そのライト係もいて、これがまあ投票済みのしるしってわけ。でも水溶性の液



コーアンデッド地区の投票所

が使われて、中には五、六回も投票した人がいたらしい。日本の新聞にも載ったかと思います。

受付で問題があると仮投票になります。問題とはカードがないとか、あっても怪しいとか不備だとか。そういう問題のある人も投票はできるんですが、左側の仮投票の長机に向かいます。通常は各州ごとに開票ですが、仮投票の方はプノンペンで、有効か無効かチェックして開票します。ぼくの担当では三日間で、総投票数は二二〇〇弱といったところでした。

監視員のぼくの仕事はね、こまかい指示も原則的にはあるんですが、実際はそれほどなくて、簡単に言えば書類の点検をするだけでした。図のように、投票所の片隅にリーダーと通訳と共に並びます。

リーダーは試験で選ばれた地元の責任者というか、ここのボスで二十六歳、ぼくと同い歳でした。通訳もカンボジア人、二十九歳。ぼくの腕時計に合わせて、投票の開始とか終了が行われました。

一投票所に、車一台と無線が付きます。無線は車の中と、警官が持っていましたが、言葉の問題などまず会話の面でも、そりゃもたつきましたよ。また当初の申し合わせからいくつか変更も生じたんですが、その説明の伝達をスタッフの人にどう納得してもらうか、苦心しましたね。

投票箱には番号をつけます。ブルーのシールを穴に通したり針金でできた錠前で封印して、それをフランス軍が運ぶんですが、中にはシールの切れてしまった投票箱が見つかったり、開票数も投票と五票や十票の誤差ならOKとか、あれって日本の選挙なら絶対やりなおしですね。

あの靴を今もはいて

何しろ二時間かかるんで自衛隊は「ちょっと来る」という感じでしたが、毎日顔を出して挨拶したり、連絡事項を伝えたり、夜は外出しないように注意したり、そしていろんな物質を届けてくれました。

水やウーロン茶、おこわや鯖のみそ煮や鮭の塩焼きなど。また日本の読売新聞とかプロ野球情報のコピィなんかもね。アンタックからくるパック詰めのビーフシチューやスパゲティもそれなりにおいしくて（続くと飽きてきましたが）、物質に不自由は感じませんでした。

第一、最初に日本政府から支給された物だって、たくさんあって。服一式でしょ、それは着ないで私服というか、Gパンはく人が多かったけれどね。ほかに寝袋や靴、ラジオにライターに水筒、リュック二つに帽子にレインコート、医薬品とか固形

燃料、それに蚊帳や磁石までみな揃って、ぼくはあのとき支給された靴をホラ、今もはいてます。

日本人が二人殺されたあとですからね、「絶対死なせるな、犠牲者を出すな」という意気込みのようなものが感じられました。何でも各監視員の実家へ毎日ほど、「今日はドコソコに行ってます」と、ひんぱんに電話連絡が入れられてたようです。

逆にぼくの方は、ラジオで実家あたりが地震だと確かに聞いたんですけどね。あれはぼくの聞きまちがえかな、それとも誤報が流れたんでしょうか、今も謎です。

開票の風景

下痢はタイで少しだけ。あとは体調よし。でもトイレですけど、穴を掘って中に板が渡してあるだけ、もちろん紙なんてありません。

もっと話したかった

現地のスタッフ全員は投票所に泊まりこんでいましたが、ぼくは文民警察の人が寝泊まりしていた木造の民家に泊まって、そこで洗濯もしてもらいました。宿泊代はね、あとで聞くと一日五十ドルも請求されて、そのまま支払った監視員もいたようです。ぼくも最初は二十ドルと言われたんですが、年収の相場を現地の人に聞きました。これが百ドルと言う人、二、三百ドルと言う人、マチマチだったんですが、結局洗濯代なども含めてぼくは四ドル払いました。四ドルは一八〇〇リエルで、分厚さが五センチくらいあったかなぁ。

地元からゴミは出ません。ゴミなんでモトモトない。でもぼくは何かと重宝かと、日本から黒いゴミ袋を持参しまして、（日本人感覚で言う）ゴミを入れて、ふと置いておきました。そしたら地元の人が寄り集まって興味深そうに中をあけ、子どもたちに中身を分配してるんです。そのあとどうなるのでしょうか。

電気もガスも電話もない。車もアンタックのものだけで、道には牛やニワトリが座ってました。地元の人にも、いわば外国人慣れがない。とにかく歩くだけですぐ人だかりがして、最初は異星人を見るような顔。占領軍が来たって気もちだったかもしれないけど、地元の人ともっと話せたらよかった、それが残念です。帰りの飛行機の中では、ああ楽しい仕事が終わったと思いました。今はなぜか遠い日に感じますが、もう一度行くなら今度こそカンボジアの人ともっと話して、ゆっくりつきあいたい、そう願いますね。（高橋幸子）

五島列島紀行③

遥かつづく海、恵みの島

一居時江

夕日ヶ浜で、夕日を眺めるための遊歩道を一人黙々と作っているおじさんに別れを告げ、私達は荒川温泉に到着した。

つげ義春や滝田ゆうの作品に出てきそうな趣き深い町だ。かつては賑わったであろう〝片町〟の面影を微かに残している。まずはお昼ごはんをと町中を歩く。猫が一匹、私達を歓迎してくれた。

海沿いにやっと一軒捜し当てる。お年寄りが二人、黙々と〝長崎チャンポン〟を食べていた。迷わず私達も注文。本場長崎で食べたチャンポンよりも素朴な味で、顔を見合わせ、思わずニンマリとする。

福江島の郷土芸能

☆チャンココ
福江に伝わる古い念仏踊り。チャンはかね、ココは太鼓の縁をたたく音。旧盆に踊る。

☆ヘトマト
十月六日、宮相撲、羽根つき、玉蹴り、網引きの順に行う民俗行事。

☆バラモン凧上げ
バラモンとは「荒くれ者、元気者」という意。五月三日に鬼岳で行う。

☆オーモンデー
嵯峨島に伝わるチャンココと同系の古い念仏踊り。オーモンデーはカネ叩きが唱える歌詞の一部。

さて、待望の温泉に入った。共同湯の中は広々としてかつ清潔。ここのお湯は神経痛や胃腸病に効くそうで、赤ちゃん連れの母親やお年寄りがゆったりと二月の午後を楽しんでいた。

名残り惜しさをグイと押しやり、日本で最後に夕日が見られるという大瀬崎の断崖へと向かった。

東シナ海の荒波を受けて水成岩地層が二十キロメートルも続く。海蝕を受けた絶壁は百五十メートルにもなろうか。見事な断崖だ。砕け散る怒濤の音は恐怖すら感じる。

旅の連れ合いは「この夕日を朝日として見るのはどこやろ」と難題を出してくる。

難題に苦しみながら海を眺め、南の明るい斜面に立つ墓群に親しみ、野生の水仙に旅情を感じ、福江島一周の旅は終わった。

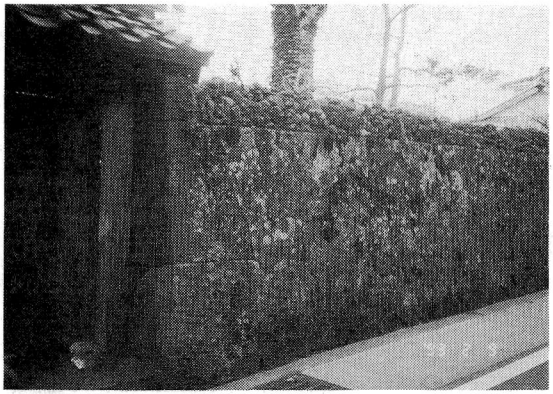
‡　‡

大小百四十余りの島々からなる五島列島。主島の福江島は面積三二四㎢ながら人々が暮らしてきた歴史が濃縮している。六千年前、縄文前期の貝塚に始まり、江戸時代の最後に建てられたとされる福江城、丸い小石を積み重ねた石垣塀の続く武家屋敷通り、仏教寺院、教会などなど。

何よりも、海に面したこの島がマリーンリゾートなどと称した空疎なリゾートゾーンになっていないのが幸いだ。プライベート・ビーチができてしまっては、島の人々にも訪れる人にも余りにも哀しい。ハワイにしろ沖縄にしろ金にまかせて進出した大手企業、不動産業に、地元の人々の嘆き哀しみを数多く聞いてきた。

海は誰の物でもない。この地球に生きる総ての者のかけがえのない地球財産だから。

（完）



こぼれ石と称する小石を積み重ねた武家屋敷の石垣塀

住まいがむすぶ
人間関係企業
RST
アールエスティ株式会社
本　社 〒600 京都市下京区堺町通四条下ル
☎075-351-4567(代)
支　店 大津・宇治
営業所 山科・左京・伏見・吉祥院

べんちゃん日記 ⑤

弁護士 唯野井太郎

○月○日

午後十一時イスタンブール空港に着く。前日の夕刻に成田をたって、フランクフルト経由のトルコ入りである。

旅は友達を作る。数年前に悪徳商法係の海外調査でヨーロッパを旅した仲間が、その時の楽しさと苦しみが忘れられずに、これで三回目の旅行である。思い出とは変なもので、景色の良さというよりも、寝台車で寝過ごして慌てて次の駅に飛び降りたこととか、帰りの飛行機に乗り遅れたとか、そんなことが脳みその中で刺激として残り、友情を確固たるものにするらしい。たとえ右に述べたようなことが全て私に原因があるとしても、しばらくすると、また私にどこかへ行こうとお声がかかるのである。旅には危険がつきまとうものであることを仲間は良く知っている。

今回の旅は、長年の夢であるトロイ遺跡を見たいという私の願望が通って、トルコに決まり、にわかに「トルコ国に於ける遺跡保全実態調査団」が結成された。団員は、常連のS夫婦が東京から、二回目のT弁護士は名古屋から、初参加は宮崎からのT氏と芦屋夫人のOさん。Oさんは脚が悪く、歩行が困難であるということで、車椅子を携行しての参加。

実は私を除く先発隊は前日から出発しており、仕事の都合で私だけが遅れて出発。午後十二時ごろホテルに着くと無事先発隊は到着していることが分かり、一安心。

全くの準備不足でトルコのことは何も知らず、買い溜めておいた本を飛行機で読んだものの、トルコリラなるものはイスタンブール空港で初めて知ったという始末。ただいま一円が八十一リラで、つまり一リラは一・三銭程度。毎年七十%近いインフレであるという。ちなみにマールボローは百三十円程度。

×月×日

トルコでの二日目。午前五時三十

ここがシュリーマンの発掘跡

分に起床してレストランで先発隊ご一行と合流。七時には大型バスでイスタンブールを出発し、ボスボラス海峡、マルマラ海、ダーダネルス海峡の西岸を南に下り、キリトバヒールからダーダネルス海峡の対岸のチャナカッレにフェリーで渡る。この海峡は対岸が見える程狭いものだが、ヨーロッパとアジア、キリスト教文化圏とイスラム文化圏を隔て、昔から通商上も戦略上も重要な通路であった。生憎の雨と強風で荒れる中の短い船旅であったが、この辺りは第一次世界大戦の激戦地でもあり、この近くのガリポリの激戦の様子はオーストラリアの映画で見た記憶があり、陰鬱な雰囲気が似つかわしく思えた。

午後には念願のトロイ遺跡のあるヒサリックの丘に到着。この周囲はオリーブ、アーモンドなどが点々とするのどかな田園風景で、折しも薄いピンクのアーモンドの花が満開である。お土産屋などは何もない。幸い、雨は止み、日暮れまでたっぷり古代の遺跡を堪能する。

トロイと言えば、中学校で「トロイのヘレン」という映画を学校ぐるみで見に行った記憶があるが、その前にダチョウと言うあだ名を持つ教師から、トロイを巡るホメロスの「イリアス」話を聞かされていて、しばらく興奮が続いたことがある。確か、シュリーマンのことを知ったのは、それからしばらくしてのことで、中学、高校と図書館でトロイに関係する本を見つけてはむさぼり読んでいた。ヒサリックの丘から数キロ先のエーゲ海が展望でき、眼をつぶると、エーゲ海からトロイを攻めて来るギリシャ軍のざわめきが聞こえて来そうな気がする。

しかし、現実のトロイ遺跡は極めて複雑な層をなしている。紀元前三〇〇〇年から五世紀まで九代に亙る都市遺跡が積み重なっているのである。シュリーマンがホメロスの話に出てくる夢のトロイは、この中の六代目（紀元前一八〇〇年から同一二七五年）の都市であり、塔、城壁、門が発掘されている。この門があの有名な木馬が入場した門であるのかどうか分からない。

日暮れ時、ダーダネルス海峡を眺望できる小さなホテルに宿をとる。ホテルのレストランの窓からダーダネルス海峡の日没を見ながら、食事をとる。焼魚の料理もトルコのワインも文句なし。

トルコという国はまだ良く分からないが、夢想の旅行をするには今のところまだ期待を裏切らない。

伝統の心を伝える
京のつけもの
義いしだ
■吉祥院店
京都市南区吉祥院池ノ内町58
TEL. 075-662-5566
■岩倉店
京都洛北叡電岩倉駅前通り ビケン岩倉ビル
TEL. 075-722-6667
■その他　大阪空港 1号、2号店
産寧坂店、風山、清水三十六峰各店

奪われる子どもたちの性

青木苗子（弁護士）

『アジアの子どもと買春』
ロン・オグレディ著
京都YWCAアプト訳

「売春」という日本語には情緒がまとわりつく。失うもののなくなった女が街角に佇んで男を引く姿を思い浮かべるのは古典的にすぎるとしても、性を売る側にも、諦めや、迷いや、貧しさと入り交じって、男を引き寄せる強い性への意欲があることが暗示されているようだ。日本の文化は、そうして強制の匂いを和らげ、性を買うことへの罪悪感を薄めようとしてきたに違いない。

本書は、「買春」という用語をタイトルに用いて、売買春にまつわる情緒をはっきりと否定した。ここで扱われているのは、アジアの貧しい国々のおびただしい数の子どもたちの性が売り買いされているという、曖昧にしておくには余りにもショッキングな事実だからである。

子どもたちに働きかける強制のシステムを、もはや曖昧な情緒でごまかすことはできない。「子どもの性」に値段を付ける者がいないかぎり、一〇歳の少女が自分の体を売ろうと

京都発 新刊三冊

ナカニシヤ出版
2500円

●四手井綱英・編
『下鴨神社　糾の森』

糾の森は、葵祭で有名な下鴨神社の境内にある。現在となっては市内では珍しい本格的な森で、訪れる者に荘厳な印象を与える。本書は糾の森について自然科学や人文科学面などの多方向から解析を試みたもの。この森を愛する京都文化人の随筆も興味深い。

晶文社
1600円

思い付くはずはない。若い女が安く手に入るという情報がなければ、助平面の観光ツアーが、大挙してフィリピンに押し掛けるはずがない。子どもたちの性は、みずからの選択で売り出されているのではなく、わが身の性を自覚しないうちから、陳列され、値踏みされ、刈り取られているのである。

台湾、スリランカ、フィリピン、タイの子どもたちは、どのようにして自分の体をわずかな金と引き替えるようになったのか。すさまじい実例が淡々と語られる。とりわけ、第四章で述べられるベドファイル（小児性愛者）の存在とその対象とされた子どもたちの被害の実態は、これまでほとんど公けにされてこなかったことだろう。西欧社会の少数者であるベドファイルは、排他的な組織を作り、本国の目の届かないアジア諸国でその欲望を開花させている。東南アジア周辺の静かなリゾート地には、ベドファイルの一行のためのホテルが点在するという。そして、そこには、あたかも人身御供のような大勢の子どもたちが用意されているのである。

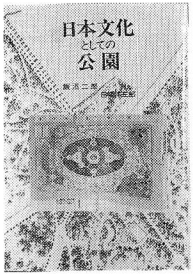
セックスがこれらの国々の観光産業のセールスポイントとされ、欧米や日本の平凡な市民が、これらの国々に出掛けて、他人に奉仕させるひとときの快楽を味わおうとする限り、子どもたちの性は奪われ続け、歪められ続けるだろう。本書は、豊富な資料に基づいて、子どもの性を商品として流通させているシステムと背景をも鋭く指摘している。

本書の中に、加害者として数名の日本人の名前が登場することに、さほど驚くべきではない。彼らに限らず、これらのシステムの中に取り込まれている私たちもまた、加害者の側に立っていることを改めて思う。そして、「売買春」の実体は、性を金に代えることではなく、一人の人間を交換価値のある商品と見ることにあると気付くのである。

●銀ちゃん便利堂・編

『老人が使いやすい道具案内』

銀ちゃん便利堂は本誌五号の老人ケア特集でも紹介した西陣の「お年寄りの生活用品」のお店。スタッフは全員女性。道具を紹介する講座や研究会なども行っている。本書はそのような活動の中から生まれたもの。単に便利な道具を紹介する本ではなく、老人ケアのあり方に主眼が置かれている。



八坂書房
2600円

●飯沼二郎・白幡洋三郎・著

『日本文化としての公園』

公園が日本に誕生して一二〇年。しかし、未だに公園は日本人になじんでいない。その疑問の追及を試みたのが本書。日本の公園は外国の模倣から始まった役所管理施設であるとの理解から出発する。著者が「公園なんかもういらない」というテーマで総合雑誌に問題提起した時は話題になった。

新党旋風は、京都でも

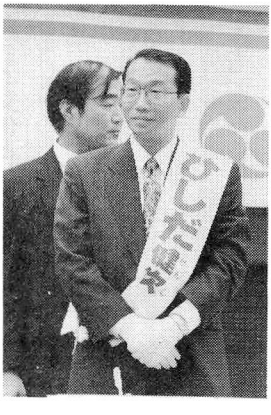
政権交替を問う注目の第四十回衆議院選挙は、七月十八日実施された。即日開票の結果、京都一区では穀田恵二（共産党）がトップ当選し、次いで前原誠司（日本新党）、伊吹文明（自民党）、竹内譲（公明党）、奥田幹生（自民党）が当選、菱田健次（新生党）が次点となった。二区では、寺前巌（共産党）、野中広務（自民党）、山名靖英（公明党）、谷垣禎一（自民党）、豊田潤多郎（新生党）が当選という結果。自民は全員当選ながら票を大幅に減らし、社会党、民社党は全滅した。

若い支持者から祝福のシャンパンを浴びる前原さん

日本新党の前原氏は松下政経塾出身の若干三十一歳、新生党の豊田氏は大蔵省出身で四十三歳。いずれも自民、社会の票を取り込んで当選した。一区の新生党候補菱田健次は、奥田と最後まで争い、一時はKBSが当確を出し、勝利宣言をするというハプニングがあったが、土壇場で引っ繰り返った。

自民党は過半数を割る結果となったが、ほぼ選挙前の二二七議席に近い二二三議席を獲得。今後の政局は混乱の中で、また選挙ということも噂されている。

菱田さん（下）は一時当確が伝えられたものの、最後に奥田さん（上）に逆転された



チャリティバザーは古物商か

留学生のためのリサイクル市を開いている財団法人「母と学生の会」が、今年も恒例の市を開いたが、その新聞記事が掲載された直後、下鴨署から、古物業法違反の疑いがあるからと呼び出しがかかった。

びっくりした会は、警察の動きに反発し、マスコミも一斉にチャリティバザーと行政規制とのぶつかり合いを報道、波紋を広げた。困った警察

側は、六月になって会の責任者と会い、催しごとに責任者を替えること、寄付の名目で金銭を受け取ること、事前に警察に相談することを今後の条件とすることを伝えて、一応幕引きをしたが、本質的な解決は先送りとなった。

古物業法は昭和二十四年に制定された古色蒼然たる法律で、盗品の不正流通を規制することが目的、反復継続的にチャリティーバザーを開催する限り、「業」として開催していることになり、形式的には、この法律によって古物商の許可が必要となる。

しかし、古物商は、古物台帳を備え付ける義務があり、施行規則では商品の詳細、入手先の住所、職業、年齢、特徴を記載するなど厳格な様式が決められており、チャリティーバザーの実態に合うものではない。この法律を厳格に適用するとボランティア活動の気勢をそぐことは間違いなく、今後古物業法の見直しが必要である。

京都の近代建築保存運動がスタート

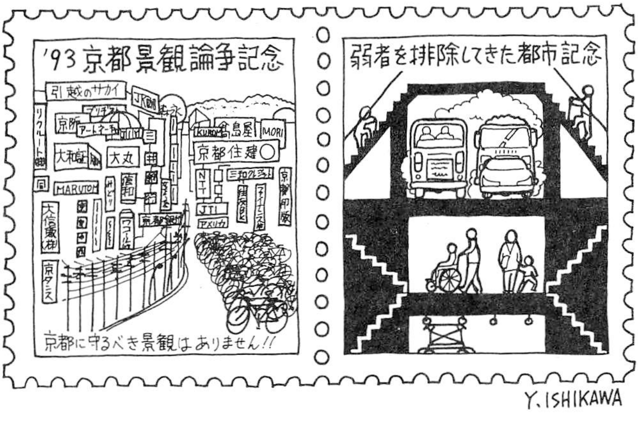
京都府庁旧館の保存運動に取り組んでいる京都府職員労働組合は、京都の近代建築全般を再発見するために「京都の近代建築を考える会」を発足させ、講演会や見学会を実施していくことになった。

この京都では、神戸、横浜と違い、近代以前の建物が多くあるために、行政も市民も近代建築保存に関心が薄いのが現実。当誌でも紹介したことのある同志社女子の静和館取壊しの時には同窓生が反対運動に立ちあがったが、市民全体には広がらなかった。今回の「考える会」の発足は、画期的な出来事。京都弁護士会の環境・公害対策委員会でも、静和館部会を今年から近代建築部会に改編し、近代建築保存制度の調査研究に取り組むことになった。

「考える会」の連絡先は451-7868（府職・今西または土屋さん）。

イラスト時評

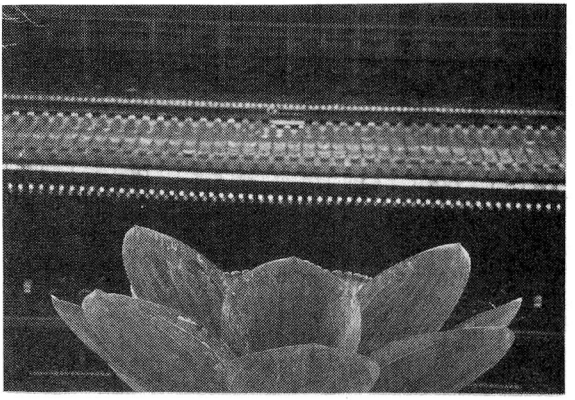
Y.ISHIKAWA



建築探偵団調書――⑦

東本願寺前噴水

円満字洋介（住生活研究所員）



この噴水はよく仕組まれていて何の不自然さも見せない。しかし、これは確かに本邦初の近代和風噴水なのである。何故これが境内ではなく街路上に置かれねばならなかったのか。何故蓮華を型取っているのか。何故他のものではなく噴水なのか。

この噴水を眺めていると初めから蓮華を型取る事が定められていた様に見える。つまり噴水の意匠を蓮華としたのではなく最初から「蓮華の噴水」を作ろうとしていたとしか思えないのだ。一九一四年、大建築家武田五一の作である。

一九一一年烏丸通りに面する三つの大門は相次いで完成し、この街は祝祭の春を迎えた。「宗祖六五〇年大遠忌」とは正に「水と光」のページェントであった。疎水より引かれたスプリンクラー装置は、三門の中央を占める大師堂門を水芸の様に水煙で包み、門前広場の夜は千二百燭光の明り（アーク灯？）に照らし出され、連なる三門を夜空に浮かび上がらせたのである（この三門の内のひとつ勅使門が武田によって桃山様式として復元された事はあまり知られていない）。

この「水と光」のモチーフは市の三大事業そのものであった。「水」とは疎水によるふんだんな上水道であり、「光」とは水力発電による電気であった。「水と光」とは当時にあって近未来を感じさせる都市的テーマであったのだ。

噴水の座る門前広場はこの祝祭のために用意されたものだ。市が三大事業の中軸となる烏丸通りを門前で

迂回させたのは、祝祭が市の考える観光都市政策に合致したからに他ならない。五十年に一度の大遠忌は東西両本願寺で開かれ、また知恩院は宗祖七〇〇年大遠忌を挙行した。これらの祝祭は市の人口の三倍にも及ぶ一五〇万人もの大観光団をこの街へ呼んだのである。

さて、法主大谷光演師は祝祭の準備に当たって画家竹内栖鳳へ大師堂門階上の大天井画制作を依頼していた。階上へは祝祭当夜阿弥陀三尊仏を安置する予定であったのだ。三尊仏遷座によって三つの門それ自体がひとつの大寺院となるのである。依頼を受けた洋行帰りの画家は欧州寺院の天井フレスコ画の様な飛天の図を構想していた様だ。しかし、画家の作業は祝祭に間に合わず遷座は延期される。この構想と武田の噴水とは無関係であるのだろうか。

一九一二年春、三大事業は完工し街は再び祝祭を迎える。完工式のテーマはやはり「水と光」とであったろう。連年の祝祭に湧いた直後、明治帝崩御し事情は少なからず変わる。登極令により三年後この街で即位の祭典が行われる事が決まった。従って門前広場は短命であった。広場は新皇帝の御料馬車の馳道として分断される事となってしまったのである。

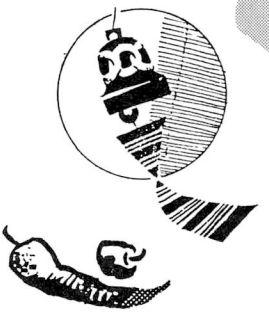
市は御大典と記念京都博の準備に取りかかった。三年後、武田の準備した街路装飾が、この街を「光の都市」とした事は先に見てきた通りである。一方光演師は画家を督促して大天井画の完成を急がせた。御大典を祝して遅延していた三尊仏遷座式挙行を期したのである。ところが天女モデルの突然の死によって、この写生派画家の作業は中断してしまうのであった（もし大天井画が完成していれば現在の門前広場の意義は相当違ったものとなっていた事だろう）。この中断された画題は一体どの様な天女像であったのだろうか。

ここまで辿れば武田の噴水の意味は明らかであろう。この噴水は一九一五年三尊仏遷座式のための舞台装置であったのではないだろうか。そうであれば、やはり御大典のモチーフも「水と光」であったと考えられるのだ。

京都市美術館の所蔵する「散花」（一九一〇年）と題する栖鳳の連作は、大天井画の習作と言われている。一方は舞楽天の輪舞であり、もう一方は天女が舞いながら蓮華弁を散花する図であった。十五年、三尊仏が大師堂門上へ遷座した夜、天上より舞い降りた天使達は夥しい蓮華の花弁を散花する手はずであった。電灯に照らし出された地上では、幾万の信徒達が見守る中、舞落ちた花弁が一基の噴水と化すのである。聖水を吹き上げるこの蓮華噴水は、まさしく大師堂門三尊仏遷座へ手向けた地上からの献花であった。

ほんの少しだけ季節を装う暮らし

奥村奈智子（主婦）



初夏のある日、いつもより段取りよく家事を片付けて、夏を装ってみることにした。

赤いカニが描いてある箱を押し入れの奥から引っ張りだしてきた。今はゼンマイ仕掛けのカニの代わりに、幼かった子供たちと拾った貝殻が、入っている。一緒に拾った貝殻の手触りは懐かしくてとても優しい。ガラスの大皿に敷いた藍色の紙ナプキンにひだを寄せて、想い出を壊さないように、わくわくした気持ちと共に、ひとつひとつ飾ってゆく。貝殻を耳元に近付けると聴こえてくる潮風の響きともしばし戯れてみる。大きなホラ貝は、薄紫色とオレンジ色の細い縞模様の尖った貝殻と一緒に飾り棚の上に並べた。あちらこちらに貝殻を置くだけで夏が装える。

傍らの透き通った器からピンクのつるバラが香ってくる。ポトリ、ポタ、ポタ、テーブルの上にこぼれた花びらはまるで、かれんな桜貝のようだ。桜貝の仲間入りでテーブルも華やいで見える。

玄関のチャイムが鳴り、そら豆のいっぱい詰ったダンボール箱が届いたことを教えてくれる。たちまち台所の床は、風がざわめきエメラルド色に光るそら豆畑に変身した。早速サヤからはじき出して、たっぷりの湯の中へ入れると薄緑色のドレスで踊り出す。薄皮をむいて鮮かな色にドレスアップしたそら豆を餡にして、ラップで包むだけでお菓子の出来上がりだ。ガス台では

「お茶の時間ョ！」

と笛吹きケットルが叫び始めている。テーブルの向こう側に夏の景色が見えてくる。

外に目を向けるとブロック塀の上から部屋の様子を伺っている隣の猫のミーちゃんの目と鉢合わせした。その横では、放射状に干した洗濯物がクルクルと忙しく廻り続けている。こんな穏やかでつましい日常生活の中にほんの少しだけ季節を装うことにこだわると気分もかわるし、張りのある豊かな暮しもできる。そして優しいこころも甦る様に思われる。

今、さりげなく
――女同士の仕事の楽しさ

人見ジュン子（ギャラリーヒルゲート）

画廊は人の交差点のような場所で、出会ったりすれ違ったり、様々な人々が交錯する。そこに居る私は、いきおい沢山の人に日々出会える恵まれた仕事にある。が、当然、慣れない商売に苦労はつきもの。己が無能にガクゼンとしたり。それだけにこうして自営業をやってみて、今まで生きてきた中で得た友人たちの存在と、その人たちに支えられることの多さを改めて感じる日々である。

友人といっても老若男女さまざまだが、やはり中でも、七〇年代女性解放運動を共にした女たちの存在が大きい。

当時、一応主婦だったFさんは、今では本職の編集者兼アートディレクター。当画廊の初期を支えた画家でもある。料理上手で、疲れた心とお腹を暖かく充たしてくれたTさんは、今は自然派レストランの経営者。パーティーの料理はもちろん、多彩な才能で力を貸してくれる。他にも、エステティシャンや先生や、子どもと女の本の専門店…。みんなが一つに集まれば小さなデパートでもできそうなくらい多彩な職業にそれぞれ進出している。

雑誌『女・エロス』編集委員会の仲間たちも、廃刊後バラバラになったものの、東京から画家を紹介してくれる人、自身が画家になって個展を開く人、はたまた絵を買ってくれる人、と女同士のネットワークは形を変えて健在である。

これら二十代で出会った女たちも今では四十代、五十代。子育てや老親看護も含めて、超多忙の働き盛り。私生活の荒波も人それぞれに乗り超えて、人生のノウハウも仕事の能力も、宝の山のような力強さを身につけている。取材で訪れる記者も、画家も画廊主も、めっきり女性が増えた。女同士が男社会の中で競い合わされるのではなく、さりげなく、協力しあって仕事をしている。そのことがうれしい。石を投げられそうだったあのリブの頃を思い出せば、この面では確実に時代は変わった、と思う。

仕事には人のつながり、信頼、協力といったものが不可欠なのではないだろうか。だとすれば、今私たちは、母たちの時代よりはるかに恵まれている。女の時代と言われて久しいが、それは、街の小さな画廊の中からの眺めにも確実に根づいているのである。

タイ・サバーイな日々を学ぶ

平良響子

二度目のタイ旅行は二月～五月にかけての滞在だった。一年中で一番暑い季節丸ごと過ごしたことになる。五月は連日四〇度近い気温がつづいた。日中好んで街をうろつくのは旅行者ぐらいと言われるのももっともな話で、タイ庶民はそんなバカな真似はしない。家で昼寝が一番「サバーイ」（快適）なのです。道端の行商のおばさんやサムロー（力車）稼業のおじさん達の生き抜いている証のような、太陽でこげた黒い肌と汗を思い出す。

タイの道はただの道路に終わらず商売の道であり人で賑わう場所だ。必然的に言葉の交流があり個々の家から外に向かって人の流れをつくっている。路上に並ぶ屋台、市場の魅力は語りきれないものがある。ついふらっと足を運んでしまう面白さとエネルギーをタイの人達は持っているのかもしれない。

十二～十三人乗りのミニバスでは乗り合わせた農家のおばさんと若い母親との会話がうまれ、ハデなサロンを巻きつけたタイのおばあちゃんに自然に席をゆずる若い男の子がいる。狭い車内では見知らぬ者どうしのヒザを支えに倒れぬよう乗降する。私のヒザに置かれたおばさんの手のぬくもりに妙に安心感を覚えたりもした。こういうのに慣れてくると、他人との間に沈黙と冷たさが漂う日本人の生活が味気ない淋しいものに思えてくる。

三ヵ月の後半タイ人家族と暮らしながらタイ語を勉強した。先生の家との往復に便利だったこのミニバスによって庶民の生活ぶりをかい間見るのが楽しくてタイの女の子のフリをしてよく利用した。有りがたいことにフリをするまでもなく、私がタイ人じゃないと気付く人はほとんどいなかった。しかし言葉がわかるというのは皮肉なものでタイ社会やタイ人のほほえみの裏にあるものまで見えてくるようになり、今ではタイの悪口だって言えるほどになった。その意味では旅行者以上のつき合いになったと言えるのかもしれない。

家族の中で一番仲良くなった年も近いラワンの作る料理は美味しかった。ノーヘル二人乗りでバイクを走らせ市場に買い物に行った日々を振り返ると何とも言えない気持ちになる。ラワンは元気にしているだろうか。チェンマイを離れる夕方、駅のホームで子供達も私も別れをおしんで泣いた。だけどラワンだけは泣かなかった。それがラワンらしくて愛おしく思う。私からの便りを楽しみに待っているそんなラワンのいるタイが好きだ。

連載物語

ステばあさんが行く ⑦

お金にうるさいのは世間の方や

神楽岡ステ

だいぶ前どすけど、うれしや、わてに便りが来ました。いっとき住んでた長岡京の郵便局からや。うっかり置いてた昔の通帳に、〝利子共で百四十五円残っています。お引き取りください〟ゆう知らせどした。

そら勿体ない。わてともあろう者が忘れちゃってサ。さっそく一丁羅の着物で召かして長岡京まで受け取りに行きました。そやけど家に帰ったら嫁の夢子が軽蔑のまなざしどすわ。「交通費を五百円ほど使うて百四十五円を引き取らはったの！」と。

きょうびの嫁は金高でしか勘定ができへん。そら合理的かもしれんけど、キリはキリやがな。放っといたら冥加に悪い。そう自分に言い聞かしてこそ、なつかしい長岡京へ行く口実もでけるというもん。世の中には損して得とれ、役立つ無駄、楽しい不満、うれしい迷惑、とゆう風情もあるのに、夢子は隠し味のわからんお人や。

わてかて勘定は得意どすえ。デパートやらスーパーでも「これナンボどす？」と聞かずにはおれん。必ず店員さんは目ェむいて「値札が付いてます」とツンケンしはる。それくらい知ってらァ、わかってます。わては「それでナンボにしてくれはるのか」と聞いているのに、きょうびの店員さんも客の心が読めん。

こないだは孫娘のエルがCDたら言う機械買うてきた。わては初確認物体を見ても「これナンボ？」と聞いてしまう。「ナンボに見える？」とエルが謎かけるさかい、「そやなぁ、しっかり二千円はしたやろ」と答えたら、「うわっ、必殺ボケ。二万円なんえ」やと。ここで引いたらステがすたります。わてはニタッと「そうどっしゃろ。近頃わての踏む値と世間の相場はひと桁ちがうようになってるんじゃい」と笑いかえしてやりましたわ。

へっ、金銭にこだわり過ぎて？そら逆さどすえ。お金に執着してはるのは世間の方や。いつやら孫の貴若と歩いてたら、道端に落ちてた一円玉を見て見ぬふり、平気で踏む。「こら、拾え」とどなったら、貴若の言うことにゃ「おばあちゃん、身をかがめて拾うエネルギーをお金に換算すると四円近いんやで。一円は拾う値打ちもない」やて。わてが拾おうとしたら「やめとき。こけてケガでもしたら大損や。ナンボかかるか」ときた。なんとせちがらい。

わては貴若みたい、自分の動作までイチイチ損得の計算して生きてまへん。拾わずにおれん！　これどすがな。

編集後記

▼三人の父がいる。三人とも、ムラに生まれて長男でない。
養父は農村の三男坊。志願兵として熱河省に渡り、のち捕虜になって四年目にシベリアから帰ってきた。家族がイワシの頭を残してさえ、マルゴトいただけと今も口うるさい。
義父は雪国の次男坊。向学心から士官学校に進み、少佐として満州に入った。敗戦後は妻とともに料理洗濯、編物にミシン掛けと家事をこなし、目立たぬ生活を静かに送った。
実父は山村の三男坊。病弱だったが補充兵として内地で働き、最期は「死んでも死ねない」と言いながら栄養失調で死んだ。当時わたしは赤ン坊、じかには彼を知らない。
男たちの声なき伝言。どういう状況と気風をもてば人を殺さないですむか。それを便り・に、私はかつて練兵場だった町で生きている。
（高橋幸子）

▼戦争で思い出すのは、長い間下駄箱の隅にあったハイカラなハイヒールだ。満鉄に勤めていた叔父夫婦が疎開の際に残していったもので、その頃は私の宝物だった。
父は学生時代の運動がたたって肋膜を患い、戦争中は木炭作りに精を出していたそうで私の中の戦争は希薄、宝物のハイヒールの彼方に侵略の歴史があることなど思いもつかなかった。
戦後四十八年。侵略戦争の敗戦処理がきっちりとなされてないため、今なお様々な問題が噴き出している。最近も戦時期の郵便貯金返済を求めて、台湾の人達が来日した。
国際化と称してPKO参加をうんぬんする前に、戦争責任をきっちりとつけるべきだ。すでに四十八年も無責任体制は続いている。
（一居時江）

▼京都に棲んで二十年。京都の伝統行事である祇園祭や大文字送り火を取材して、またひとつ、その伝統の重さとしきたりを支えて来た人々の心意気を学ばせてもらった。
原稿厳重締め切り前日に飛び込んで、資料提供をお願いしたところ、心よく暖かい協力をして下さったさくら銀行京都文化財展示室の今北昌宏氏には心から感謝。
他に大文字保存会の安西幸夫氏、山鉾連合会、京都市文化財保護課の方のご協力をいただいた。
この夏、五山送り火の八月十六日、私の長女は十七歳の誕生日を迎える。これも何かのご縁。京都との縁が深まってゆく。
（塚崎美和子）

▼自衛隊、PKO問題は憲法解釈というレベルではなく、政策論の問題であると考えるが、これを考えるについて、戦争の実態は、殺し合いの戦場からだけではなく、銃後の生活も含めた戦時の国家体制の実態も考える必要がある。今回の特集は、このようなだいそれた目的で戦時中の京都の総体を探ろうとした。時間の関係で不十分な取材に終わったが、これをお読みになった方から、もっと多くの資料や証言が得られれば、再度特集を組みたいと思う。
（折田泰宏）

次号予告
特集 京都の川とくらし（仮）
十月五日発売

合評会のお知らせ
この七号の合評会を八月二十七日(金)当社事務所で行ないます。夜七時、ぜひご参集ください。お問い合わせは七七一・四三七五か、六四二・七九六二まで。

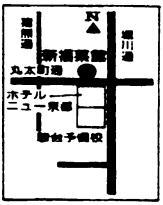
佛蘭西風喫茶室
フランソア
京・四条小橋下ル
TEL.351-4042

ご存知 ラーメンの元祖

あの 京都駅たかばしの 新福菜館が 河原町店に次いで 堀川丸太町にも……

たっぷりのチャーシュー！ 独得のしょうゆ味！

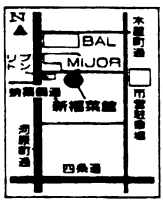
飲んだあとにはラーメンが旨い



丸太町店
■午前11:30〜午前3:00
■定休日 水曜日
京・上京区堀川通丸太町西入北側
phone(075)822-4070

河原町店
■午前11:30〜午前3:00
■定休日 水曜日
京・中京区河原町錦小路東入南側
phone(075)231-2355

新京都伝販カードをご利用ください。



安田火災海上保険(株)
代理店
(株)リリーフ

〒613 京都府久御山町田井ミスノ51-2
トラストビル3F
☎(075)632-2290(代)

安心の切り札！
損害保険のことなら
おまかせ下さい。

京都 TOMORROW 1993.9

Vol.2 第7号(通巻29号) 定価510円(本体496円)

隔月刊誌

発行 株式会社・京都TOMORROW 代表 豊永家明

編集委員 一居時江
折田泰宏
高橋幸子
塚崎美和子
編集協力 田中真人
レイアウト 松田普美子

〒606 京都市左京区吉田神楽岡町8(楠本方)
TEL075-771-4375
FAX075-771-9837

ご購読ご希望の方へ

●1部購読 510円〔送料込み 685円〕
●年間購読 3,060円〔送料込み 4,000円〕

ご購読希望の方は、郵便振替・京都2-20274
京都TOMORROW

印刷／㈱コミュニティ洛南 〒601 京都市南区西九条大国町33 ☎075-661-5210 FAX075-672-0788

定価510円(本体496円)

ISSN 0915-1036